
研究論文

日本語母語話者によるスペイン語冠詞選択の傾向と誤用分析
－英語母語話者およびスペイン語母語話者を参照群としたコーパス研究－

小橋 さおり^{1)*}

【要 旨】

本研究は、日本語母語話者（JP 群）によるスペイン語作文 39 編（学習者コーパス CEDEL2、延べ語数 4,583 語）を主な分析対象とし、同一課題による英語母語話者 35 編およびスペイン語母語話者 33 編の作文を参照しながら、冠詞選択の傾向と誤用の特徴を記述したものである。分析に際しては、談話環境（初出／再登場）、名詞タイプ（単数／複数、可算／不可算）、名詞句における修飾要素の有無という観点から誤用分布を整理した。その結果、談話環境別に見ると、誤用は相対的に初出環境に多かった。名詞タイプ別では、単数・可算名詞に比較的多くの誤用が見られた。修飾要素に関しては、修飾を伴わない名詞句において誤用が観察される一方、前置詞 *de* を用いた補語や関係節を伴う場合には誤用が相対的に少なかった。以上の結果から、JP 群における冠詞誤用は「初出環境」かつ「単数・可算名詞・修飾なし」の場合に発生する可能性が高く、この条件下の誤用を確認したところ、不定冠詞が必要な文脈において定冠詞を用いる誤用が中心であることが明らかになった。一方、同型の再登場環境では定冠詞使用は比較的安定しており、導入機能に比べ照応機能が先行して習得される傾向が示された。

キーワード：外国語としてのスペイン語、エラー分析、学習者コーパス、冠詞、日本語

Original Articles

**Error Analysis and Tendencies in Spanish Article Selection by Native Japanese Learners:
A Corpus-Based Study with English and Spanish Native Speakers as Reference Groups**

Saori KOBASHI^{1)*}

【Abstract】

This study analyzes 39 Spanish compositions written by native Japanese speakers (JP group; CEDEL2, 4,583 words) and compares them with 35 compositions by native English speakers and 33 by native Spanish speakers completing the same task, in order to describe tendencies in article selection and characteristics of article misuse in the JP group. The analysis examines article use and error distribution with respect to discourse context (first vs. subsequent mention), noun type (singular/plural; count/non-count), and the presence of modifiers. Findings show that errors in the JP group concentrate in “singular × countable noun × no modifier” patterns appearing in first-mention contexts. Errors were most common in unmodified noun phrases, whereas fewer errors were found in noun phrases containing *de*-complements or relative clauses. The results suggest that article errors in the JP group are most likely to occur in first-mention contexts with singular, countable, unmodified nouns. In such cases, errors primarily consisted of using the definite article where an indefinite article was required. By contrast, definite article use was relatively stable in subsequent-mention contexts, suggesting that the anaphoric function of articles is acquired earlier than their discourse-introductory function.

Key words: Spanish as a foreign language, error analysis, learner corpus, articles, Japanese

¹⁾ 順天堂大学 国際教養学部 (Email: s-kobashi@juntendo.ac.jp)

[2025 年 11 月 10 日原稿受付] [2026 年 2 月 20 日掲載決定]

緒言 (背景と目的)

日本語母語話者にとって、スペイン語の冠詞は習得が困難な文法カテゴリーである。これは、冠詞選択が統語的知識だけでなく、談話的条件 (新情報の導入や既知情報の参照) など、語用論的要因を含む複数の要素に基づいて判断されるためである。

日本語母語話者のスペイン語冠詞使用に焦点を当てた実証的研究はそれほど多くない。Fernández (1988, 1997) は、複数の母語話者 (ドイツ語、アラビア語、フランス語、日本語) を対象に作文課題および冠詞の穴埋めをさせる文章課題を用いてスペイン語冠詞の誤用について調査した。その結果、日本語母語話者では冠詞誤用が初級段階にとどまらず、中級・上級段階に至るまで持続することを報告している。一方で、西川 (2006) は日本の大学でスペイン語を学ぶ大学生を対象に、冠詞に限定した文法性判断課題 (文脈から切り離れた短文) を実施し、スペイン語知識の深化に伴って冠詞の誤用が減少するという結果を示している。

当然のこととして、各研究はそれぞれの目的に基づいて異なる調査方法を採用しているため、結果を単純に比較することはできない。例えば、誤用分類に関して、作文課題において、Fernández (1988, 1997)、Saito (2005) などでは、余剰 (不要な箇所への使用)、脱落・不足 (必要な箇所での未使用)、置き換え (定冠詞と不定冠詞の混同) の3類型に分類され、それぞれの頻度が数値として示されている。一方、文法性判断課題では、西川 (2006) のように、回答は正誤に二分され、その正解率が提示される。また、産出課題においては、テーマの選択が結果に影響を及ぼすことも指摘されている (Smith, 1989)。

そこで、Kobashi (2017) は、スペイン語習熟度の向上に伴って冠詞誤用が減少するか、また、学習者がどの冠詞 (定冠詞4種類、不定冠詞4種類、無冠詞の計9種類) を混同しやすいのかを明らかにすることを目的とし調査を行った。

質問票は定冠詞・不定冠詞・無冠詞の3択形式 (文脈の考慮を必要とする問題を含む) とした。その結果、スペイン語習熟度の向上に伴って冠詞誤用は減少し、特に定冠詞と無冠詞の使用に困難が見られた。さらに、名詞の種類 (可算名詞/不可算名詞) や修飾の有無が、冠詞の選択に影響することが明らかになった。

一方で、この研究は、学習者が自由な環境の中で冠詞をどのように運用しているのかという点については十分に扱っておらず、また、誤用にどの要素 (名詞の種類や修飾の有無) がどの程度影響を及ぼすのかも明らかになっていない。既習言語の影響についても、可能性は示唆されたものの検証は行われていない。

その後、スペイン語冠詞の使用実態を把握するため、Yonekawa & San-Mateo-Valdehita (2021) によってコーパス研究が行われた。これは日本語母語話者を対象としてスペイン語冠詞の使用にのみ焦点をあてたもので、余剰・脱落・置き換えの3分類を軸に誤用分析が行われた。結果として、すべてのレベル (初級・中級・上級) において初出の名詞に定冠詞を使用するタイプの誤用が多いことが報告されている。

以上の背景を踏まえ、本研究の目的は、日本語母語話者 (JP 群) のスペイン語冠詞選択の傾向と誤用の特徴を、英語母語話者 (EN 群) およびスペイン語母語話者 (NS 群) を参照しつつ、形態的側面と談話的側面の両面から明らかにすることとする。とりわけ、冠詞が担う談話管理機能 (新情報の導入・既知情報の照応) と、名詞句内部の要素 (名詞タイプおよび修飾の有無) が、誤用の分布にどのように関与するのか、要素別に分解して誤用との関係を探索的に考察する。

本研究の特徴は、第一に、名詞句の構成要素および談話的条件に着目し、冠詞誤用について体系的に分析する点にある。第二に、英語母語話者 (EN 群) およびスペイン語母語話者 (NS 群) のデータを参照することにより、日本語母語話者 (JP 群) に特有の冠詞使用の特徴を明

らかにする点である。

また、本研究の意義は、日本語母語話者におけるスペイン語冠詞習得過程の解明のための基礎的知見を提供することにある。得られた知見は、将来的にスペイン語教育における教授内容や指導順序の検討の際の一助となる可能性がある。

1. 理論的背景

本章では、後続の検証を行うための枠組みを整理する。1.1 は、主にスペイン語冠詞の形式・用法について、談話機能と名詞句構造に焦点をあてながら記述し、分析項目の設定のための根拠を示す。1.2 では、英語および日本語の照応表現を説明し、JP 群のスペイン語冠詞選択に影響しうる言語間の差異を提示する。1.3 では、誤用分析および第 2 言語習得研究の知見を示し、誤用を解釈するための枠組みを導入する。

1.1. スペイン語冠詞体系の基本的特徴

本稿では、スペイン語文法について『スペイン語記述文法』(Leonetti, 1999) および『新スペイン語文法』(Real Academia Española (以下 RAE), 2009) を基本的な立場とする。

スペイン語の冠詞は、定冠詞 (*el, la, los, las*) と不定冠詞 (*un, una, unos, unas*) に区別される。これらは、名詞の性 (男性名詞・女性名詞) と数 (単数・複数) に応じて形を変え、基本的には名詞句の先頭に置かれる (RAE, 2009)。形態的には独立語であるが、前置詞 *a, de* の後に定冠詞 *el* が配置される場合には、*a* と *el* は *al* のように、*de* と *el* は *del* のように縮約形を取る (Leonetti, 1999; RAE, 2009)。本研究では *lo* は対象外とする。

冠詞の基本的対立は「定性 (*definitud*) / 不定性 (*indefinitud*)」の対立にあり、定冠詞は聞き手がどの対象か特定できると話し手が前提するとき用いられ、不定冠詞は談話にまだ導入されていない非同定の対象を提示するとき用いられる (Leonetti, 1999; Morimoto, 2011)。し

たがって冠詞 (定冠詞・不定冠詞) は、聞き手にとってその名詞がアクセス可能かどうか (*accessibilidad*) を示す指標としての機能がある (Kempson, 1986)。

また、定冠詞は唯一の指示対象を表す場合に用いられる。これは、単に種の中で唯一の存在 (例: 太陽) を指す場合に限らず、文脈において唯一の関連性を持つ要素を示す場合にも適用される (Leonetti, 1999; RAE, 2009)。言い換えれば、聞き手が最も関連性の高い要素を補完するという観点を採用することで、文法的説明のみでは捉えきれない現象、たとえば同一の発話が状況に応じて異なる解釈を導く場合などを説明することができる。

定冠詞の用法について、Leonetti (1999), RAE (2009), Bosque (1990) に基づき、寺崎 (2024) を参照すると、以下のようにまとめられる。

①照応用法 (*Usos anafóricos*) には、直接照応 (*Anáfora directa*) と連想照応 (*Anáfora asociativa*) がある。前者は同じ語彙を繰り返して言及する (2 回目以降に登場する名詞に定冠詞を使用する) 用法で、後者は 2 つの関連する内容 (概念的な関連性が手がかり。初回の指示対象物と何らかの関連性のあるものに 2 回目以降は定冠詞を使用する) により照応が可能となる。

②文内照応用法 (*Uso endofórico*)、もしくは修飾のある非照応用法 (*uso no anafórico, basado en la presencia de modificadores*) は、文中で初めて導入される名詞であっても、その名詞が同じ文の中で付加される情報 (修飾語や補語など) によって指示対象が明確になる場合に、定冠詞の使用が認められる用法を指す。指示対象を説明し限定する文法的手段としては、関係詞 *que* などを用いた関係節、前置詞 *de* を用いた補語や同格の名詞句、形容詞などが挙げられる。

③直示用法 (*Uso deíctico*) は、話し手や聞き手を取り巻く状況 (指差しや指示物のすぐ横にある張り紙など) により指示対象物が同定できる場合の定冠詞の使用法である。

④様々な種類の知識に基づく非照応用法 (*Uso*

no anafórico basado en diversas clases de conocimiento) では、話し手と聞き手が共有している一般的な知識や常識 (個人的な出来事も含む) を話題にすると、名詞に初めて言及するときから定冠詞の使用が可能となる。

⑤総称用法 (Uso genérico) は、名詞が特定の個体ではなく、その名詞が指す種類やカテゴリ、種類全体の特性を述べるときに使われる用法である。スペイン語では、定冠詞・不定冠詞・無冠詞のいずれを用いても総称的な表現を作ることができる。

⑥慣用表現 (Expresiones lexicalizadas) は、固有名詞 (人名など) や慣用句 (ステレオタイプ化された日常表現も含む) など、基本的に冠詞の種類や有無を自由に選べない固定的な表現を指す。(Leonetti, 1999; RAE, 2009)。

続いて、不定冠詞の用法について、RAE (2009) に基づいて整理をすると次のように分類される。
①初出の指標としての用法 (Uso como marcador de primera mención)、②照応用法 (Uso anafórico)、連想用法 (anáfora asociativa) もしくは追加的記述情報用法 (información descriptiva adicional) とも呼ばれている、③評価的用法 (Usos evaluativos)、④強調用法 (Uso enfático)、⑤総称用法 (Uso genérico)、⑥量的用法 (Uso cuantitativo)、⑦慣用表現 (Expresiones lexicalizadas)

本研究で重要なのは用法①で、話し手が談話に新しい情報を導入するとき不定冠詞を使用するものである。

無冠詞名詞の使用についての要点は、冠詞を伴わない名詞は種類やカテゴリを示し、特定の個体を指せないことである。これに対し、定冠詞・不定冠詞は特定の個体を指示するために用いられる (Morimoto, 2011)。

次に、限定詞を伴わない名詞句 (すなわち、無冠詞の場合) の分布と機能を、名詞の可算・不可算の区別に基づいて説明する。Morimoto (2011) によれば、名詞は、I. 可算名詞の複数形および不可算名詞の単数形 (統語的に同様にふるまう) と、II. 可算名詞の単数形に分類で

きる。可算名詞 (mesa [机], casa [家] など) は個別に数えられる実体を、不可算名詞 (agua [水], amor [愛] など) は物質や抽象概念を指す。不可算名詞が無冠詞で用いられるときは、物質の種類や性質を表す。また、café [コーヒー], amor [愛] などのように、可算・不可算で意味が変化する名詞も存在する。統語的には、無冠詞名詞は主語位置にはほとんど現れず、主に述語内部に出現する。典型的な位置は、動詞の後の主語、直接目的語、補語、または前置詞句などである (Bosque, 1996; Laca, 1999; Morimoto, 2011)。

1.2. 英語冠詞体系および日本語における照応表現

まず、英語の冠詞体系について、その中心は、定冠詞 *the* と不定冠詞 *a/an* である。Larsen-Freeman & Celce-Murcia (2016) によれば、その選択は名詞の種類 (普通名詞・固有名詞) および数 (単数・複数) によって決定される。特に「単数可算名詞には冠詞が必須であり、複数名詞および不可算名詞では無冠詞が許容される」という形態的制約が大きい。一方で、定名詞句と不定名詞句の対立について、Huddleston & Pullum (2019) は「同定 (identifiability)」の可能性に基づくものとして説明する。すなわち、英語においてもスペイン語と同様に、話し手が指す対象が聞き手に同定可能であるか否かが、冠詞選択を左右する一因となる。

スペイン語の冠詞とそれに相当する日本語表現については、Kobashi (2017) で詳細に検討した。ここでは、同研究を要約し、スペイン語冠詞の機能が日本語においてどのように実現されているかを確認する。

日本語には冠詞という文法カテゴリーは存在せず、名詞 (ON) が文脈に応じて既知の対象を指示し定冠詞的機能を果たすことができる。相当する表現としては、無冠詞名詞句 (ON)、指示詞 (コ・ソ・ア系)、人称代名詞、所有表現などがあり、名詞の繰り返しや、「先述の N」

「いわゆる N」などの特定表現も可能である。また、助詞「は」と「が」が既知情報と新情報を区別する点において定性・不定性の区別に相当する役割を担う場合もある。

不定冠詞の機能は、新情報の導入や数量の提示によって表される。初出の名詞は通常、無標形名詞句 (ØN) が助詞「が」とともに現れ、新情報を導入する。再登場する場合には、同一名詞の繰り返しや指示詞 (コ・ソ系) によって照応関係が示される。また、評価的あるいは総称的な文脈では、「N というもの」や無標形名詞句 (ØN) によって表現される。

スペイン語の冠詞の機能の多くは、名詞句 (ØN) を中心に表現されることが確認されており、具体的にはスペイン語における冠詞を伴う名詞のうち約 75 ~ 80% は、日本語では無冠詞の名詞句によって対応づけられる (Kobashi, 2013)。残る部分は、指示詞、助詞、あるいは語彙的手段によって実現される。

Morimoto (2025) は、日本語では、共有情報を形態的に明示することが必須ではなく、省略することも可能であるため、聞き手のアクセス可能性を冠詞によって標示するスペイン語の体系とは構造的に対応しにくく、このような言語間の差異が、学習上の困難の一因となる可能性があることを指摘している。

1.3. 誤用分析と第 2 言語としての冠詞習得研究

誤用分析とは、第二言語学習者の誤りを体系的に分析し、その原因や学習過程を明らかにしようとする研究領域である。Corder (1967) は、誤りは単なる失敗ではなく、学習者がどの段階にあり、どの知識がまだ習得されていないのかを示す手がかりであると述べ、誤りを学びの過程に不可欠な現象として位置づけた。この見方は、Selinker (1972) の提唱する中間言語 (interlanguage) と呼ばれる概念へと発展し、学習者が母語と目標言語の影響を受けながら独自の体系を形成する過程を説明する理論的枠組みを提供した。Centro Virtual Cervantes (n.d.) も、学

習者の中間言語を「一貫した規則をもつ体系」として説明している。

また、Dulay & Burt (1974) は誤りを「転移的誤り」(母語や既習言語知識の影響) と「発達の誤り」(母語に由来しない普遍的な発達過程や一般化による産出) に分類し、これを本研究に適用すると、日本語母語話者のスペイン語冠詞の誤用は、冠詞という文法カテゴリーを持たない日本語 (母語) の影響および既習である英語冠詞知識の干渉 (転移的誤り)、それに加えて学習段階に応じた誤用 (発達の誤り) も発生するなど、複数の要因が作用した現象として捉えることができる。

さらに、Ionin, Ko & Wexler (2004) は、学習者が冠詞を選ぶ際の基準そのものを誤って理解している場合があると報告している。具体的には、本来は「聞き手がその名詞を特定できるかどうか (定性)」で判断すべきところを、「話し手が頭の中で特定のを思い浮かべているかどうか (特定性)」で判断してしまう傾向があるという。彼らは冠詞選択の誤りを「定性 (definiteness)」と「特定性 (specificity)」の混同として説明し、話し手自身の中で特定しているという理由で定冠詞を選ぶ傾向が、初出文脈での不適切な定冠詞使用を導くと論じている。

2. 研究方法

本章では、後続章における誤用分析に先立ち、対象データと分析手順について説明する。2.1 では、使用コーパスの概要と採用理由、ならびに分析対象データの選定基準について詳述する。2.2 では分析の具体的な流れを説明し、本研究で検証する観点を明確にしたうえで、各表がどの目的に対応して作成されたものであるかを示し、後続の結果章における分析との対応関係を整理する。

2.1. コーパスと情報提供者

本研究では、スペイン語学習者オンラインコーパス CEDEL2 (v.2.0) (Lozano, 2022) に収

録された自由記述作文を分析対象とした。同コーパスには 14 種類の課題が設定されており、本研究ではそのうち「複数のイラストを見て物語を記述する課題」を扱った。使用したデータは 2017 年から 2020 年の期間に収集された。また、分析作業は 2025 年 8 月から 12 月にかけて実施した。

本コーパスを採用した理由は、(1) 情報提供者には、日本語母語話者だけでなく、英語・スペイン語母語話者が含まれていること、(2) 共通のテーマで作文が書かれていること、(3) CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) (Council of Europe, 2001) に準拠したスペイン語習熟度レベルに加え、母語および家庭内言語、両親の使用言語、所属、学習開始年齢、作文時年齢、外国語の知識など学習者背景に関する詳細な情報が提供されていることである。

理由 (1) については、JP 群の作文を主な対象とし、EN 群および NS 群を参照群として設定しているためである。理由 (2) は、課題テーマの違いが結果に影響する可能性が指摘されていることから (Smith, 1989)、比較可能性を確保するために同一課題のデータのみを用いた。また、同一課題に限定することにより、場面や登場人物が共通していることから、出現する名詞の差異を最小限に抑えられ、語彙による冠詞選択への影響を一定程度抑制できると考えた。また、本課題は、文字を伴わない 12 枚のイラストに基づく自由記述であり、学習者の自然な冠詞使用の傾向を観察するのに適していると判断した。理由 (3) は、複数の母語群の比較を念頭において、可能な限り条件を近づけるためには背景情報が重要となるためである。

分析対象となるデータの選定にあたっては、3 群共通の基準として、情報提供者の①母語および家庭内言語、②スペイン語学習の開始年齢 (40 歳以上は除外)、③回答時の年齢 (50 歳以上は除外) を設定した。

母語および家庭内言語については、JP 群は母語・家庭内言語ともに「日本語」、EN 群は「英

語」と回答しているものを対象とした。NS 群については、母語が「スペイン語 (スペイン)」、家庭内言語も「スペイン語」と回答しているものに限定し、中南米のスペイン語話者やスペインの他の公用語話者は除外した。

EN 群については、上記条件に加え、データ収集時の所属がアメリカ合衆国の大学であることを条件とし、他国 (イギリス・カナダ) の大学に所属するものは除外した。NS 群は、年齢は 17 ~ 22 歳に限定し、外国語の知識として「英語」以外を挙げている場合は除外した。加えて、極端に字数が少ない、または多い作文、課題逸脱が認められる作文 (例: アクセント記号が全く付されていない、誤字脱字が著しく多いもの) も除外した。

年齢条件については、JP 群および EN 群の多くが 10 ~ 20 代 (主に大学生) であったことから、NS 群の年齢を 17 ~ 22 歳に限定した。また、JP 群と EN 群では、年齢の上昇に伴う認知能力低下の可能性を考慮し、スペイン語学習の開始年齢および回答時の年齢に上限を設けた。

以上の基準で選定された標本数は、JP 群が A1: 3 点、A2: 9 点、B1: 6 点、B2: 6 点、C1: 9 点、C2: 6 点、EN 群が A1: 3 点、A2: 7 点、B1: 7 点、B2: 5 点、C1: 9 点、C2: 4 点、NS 群は 33 点となった。標本数が限られているため、レベルについては CEFR の 6 段階を 3 段階に再分類し、初級 A1 と A2 を A レベル、中級 B1 と B2 を B レベル、上級 C1 と C2 を C レベルとした (表 1)。

表 1 に、使用データの概要を示した。なお、異なり語数についてはレベル間で重複が生じるため、総計ではなく「全体」という表記を用いた。

最終的な情報提供者の構成は以下のとおりである。JP 群は A レベル 12 名 (平均年齢 19.8 歳)、B レベル 12 名 (平均 23.0 歳)、C レベル 15 名 (平均 36.4 歳) であり、男性 12 名、女性 27 名である。EN 群は A レベル 10 名 (年齢 19.8 歳)、B レベル 12 名 (平均 20.5 歳)、C レベル 13 名 (平均 21.3 歳) であり、男性 11 名、女性 24 名で

表 1. 使用データの概要

母語	レベル	標本数	延べ語数 (token)	異なり語数 (type)	Type/Token ratio (%)
JP	A	12	769	267	73.97
	B	12	1153	367	75.58
	C	15	2661	651	77.39
	全体	39	4583	930	75.49
EN	A	10	947	266	69.35
	B	12	1303	314	68.52
	C	13	1789	461	74.90
	全体	35	4039	705	71.14
NS	全体	33	5339	1138	79.12

ある。NS 群は 33 名（平均 20.0 歳）、男性 8 名、女性 25 名である。

なお、Yonekawa & San-Mateo-Valdehita (2021) においても CEDEL2 が用いられているが、本研究では、母語群間の比較を行うにあたり情報提供者の年齢に一定の制限を設けている点に特徴がある。

研究の透明性および再現性を確保するため、使用した情報提供者の一覧を巻末付録（表 8）に掲載する。

2.2. 分析手順ならびに表・データの整理

まず、情報提供者の背景情報と作文内容を精査し、先述の基準（2.1. 参照）に該当しないデータを除外した。その後、分析対象となる作文（JP 群・EN 群）について、スペイン語を母語とする研究者が誤用箇所を指摘し、正用例を併記する形で添削を行った。この研究者はスペインのスペイン語を母語とし、スペイン語能力試験 DELE（A・B・C レベル）の採点資格を有するとともに、英語・スペイン語間の翻訳業務にも従事している。

次に、Python (ver. 3.13.7) 上で spaCy (ver. 3.8.7) を用い、スペイン語のメディアムモデル (es_core_news_md, ver. 3.8.0) を適用して、形態素解析、品詞付与、およびレンマ化¹⁾を行った。解析に際しては、作文に見られる綴りやアクセントの誤りは事前に修正せず、そのままの形で解

析に供した。総使用語数および異なり語数の算出にも同じく spaCy (ver. 3.8.7) を用いた。

これらの出力結果に基づき、各母語群およびスペイン語習熟度レベルごとの標本数、延べ語数 (tokens)、異なり語数 (types)、type/token ratio (以下 TTR) を表 1「データの概要」にまとめた。金子 (2013) によると、延べ語数 (tokens) は総使用語数のことで、出現した語の総数であり同一の語もカウントされる。異なり語数 (types) は、異なった語の出現頻度を示すものである。異なり語数と延べ語数の比率 (type/token ratio) は、語彙の多様性を表す指標であり、ある文章が 100 語から成り、70 語の違う語彙が用いられていれば、0.70 (70%) となる。つまり、この比率が高いと多様な語彙が用いられているということになる。本研究では語彙能力そのものを調査対象とはしていないため、群間およびレベル間で標本数や語彙多様性に著しい偏りがなことを確認するための基礎資料として位置づける。

続いて、品詞タグと名詞の性数情報が適切に付与されているかを、名詞を中心に目視で確認した。誤付与の場合には、出力結果の修正を手動で行った。これは、綴りやアクセントの誤りを含む語は固有名詞として分類されるためである。無冠詞の場合には「Ø」を付加した。その後、文脈上必要とされる冠詞（定冠詞・不定冠詞・Ø）を入力しつつ、学習者が実際に産出した冠詞と

照合した。冠詞の正誤判定は、信頼性および一貫性を確保するため、前述のスペイン語母語研究者と日本語母語のスペイン語研究者の2名が独立に検証を行い、不一致箇所については協議により合意を形成した。また、冠詞選択に焦点を当てるため、選択の余地がない慣用句 (*locución*)²⁾ は JP 群、EN 群、NS 群のデータから除外した。

さらに、レンマ化情報を参照し、各名詞について初出の場合は F、再登場の場合は R を入力した。併せて、名詞ごとに①形容詞の有無、②前置詞 *de* による補語の有無、③関係詞 *que* などによる関係節の有無について、それぞれ「y(あり)」または「n(なし)」として記録した。これらの手順は JP 群および EN 群に適用し、NS 群については、冠詞をすべて正用とみなして同様の処理を行った。

以上の情報を表形式で一覧化し、冠詞の種類、正用・誤用、文脈上必要な冠詞、談話環境(初出/再登場)、名詞修飾要素といった観点からデータを集計した。その結果を表2から表7として提示する。本研究では標本数の制約を踏まえ、記述統計に基づく探索的分析を採用し、冠詞使用の傾向を記述することを目的とする。

表2「誤用分布 (JP 群全体)」および表3「誤用分布 (JP 群レベル別)」は、JP 群の全体およびスペイン語習熟度レベル別の誤用の詳細を検証するとともに、誤用が一定の規則性にに基づいているかを確認する(1.3. 参照)のために作成した。なお、表2において、定冠詞 *el* に関して、縮約形 *al* および *del* の正用・誤用については別枠として示し、総数および誤用率の算出には含めなかった。これは、冠詞を単独で用いる場合と、冠詞と前置詞と関係を考慮して形態的操作が必要な縮約形 *al*・*del* (1.1. 参照) では誤用のメカニズムが違ふと考えられるためである。ただし、無冠詞を選択したが、文脈上定冠詞 *el* が必要だった場合には、縮約形 *del*、*al* が正解であった場合にも定冠詞 *el* としてカウントし、その旨を表下部に記した。

表2と表3の表形式(フォーマット)については、表2のJP群全体で使用した同じ表形式をスペイン語習熟度レベル(A、B、C)の場合にも使うと、0件の欄が多いにもかかわらず表2の3倍の紙面が必要になってしまう。紙幅を割かず情報(文脈上必要な冠詞/Øなど)を提示する意図でこのような提示方法を採用した。

表4「誤用分布(3群比較表)」では、母語群間の比較に際して標本数の差の影響を抑えるため、値を10,000語あたりの相対頻度に正規化して提示した。図1は、表4のJP群およびEN群の使用総数(表4においては正誤計として記載)について棒グラフとして可視化し、参照用としてNS群の使用総数も同様に正規化して示したものである。

表5「談話環境別の誤用分布 (JP 群・EN 群)」において、項目名については、「JP-F」はJP群において名詞が初出(F)の場合を指し、「JP-R」は同群の再登場(R)の場合を示す。「EN-F」、「EN-R」はEN群のデータにおいて、Fが初出、Rが再登場の場合を指す。誤用ペアの列に見られる2種類の冠詞(無冠詞はØ)について、矢印の左側には学習者が実際に使用した冠詞、右側には文脈上必要だった冠詞が書かれている。例えば、誤用ペア「*el* → *un*」は、学習者は *el* を選択したが、文脈上必要な冠詞は *un* だったことを意味する。母語群間比較を可能にするため、値は10,000語あたりに正規化した。

表6「名詞別の誤用分布」は、JP群において出現回数が多かった名詞(6回以上)を対象に、名詞ごとの正用数・誤用数・誤用率を一覧化したものである。JP群の実数値に加え、JP群・EN群・NS群の正規化値を併記することで、共通のイラストを参照して作文が作成されているという条件を活かし、名詞のタイプ(名詞の性、数、可算/非可算)と誤用との関係を検討できるようにした。JP群の出現回数が多い名詞を上から順に並べ、EN群とNS群もJP群の順序に従って並び替えた。非可算名詞や集合名詞を含める意図で、JP群の上位25位までを表

に記載した。視覚的理解の補助を目的として、誤用率の10%～19%には薄い色、20%以上には濃い色をつけた。EN群の頻出名詞を出現回数順に並べたものを註3に、NS群も同様の方法で註4に提示した。

表7「修飾要素と誤用分布」は、名詞句を構成する要素に着目したものである。表中には、「①形容詞、②前置詞 *de*、③ *que* などを使用した関係節」の各要素について、「あり (y)」の場合、「なし (n)」の場合を、3つ並べた形で提示した。例えば、「①形容詞なし、②前置詞 *de* を用いた補語なし、③関係節なし」の場合には、「n,n,n」となり、「①形容詞あり、②前置詞 *de* を用いた補語なし、③関係節なし」の場合には、「y,n,n」となる。JP群とEN群については誤用の詳細についても記載され、表中の「el → un: 17」は、学習者は *el* を選択したが、文脈上は *un* が必要であったという内容の誤用が17件発生したということを示している。JP群には5タイプ (“n,n,n”, “y,n,n”, “n,y,n”, “n,n,y”, “y,y,n”) の記載があるのに、EN群には2タイプ (“n,n,n”, “y,n,n”) しかない。すなわち、この他のタイプは、正用の使用であったか、使用されなかったということである。NS群においても、記載のないタイプは今回のデータには使用がなかったということである。NS群については、すべて正用とみなし参照のために提示した。

本稿では、具体的に以下の観点から検証を行う。

(1) JP群のスペイン語習熟度レベルの向上に伴う冠詞選択の変化を明らかにすること。

(2) JP群の誤用は以下のどの要素と結びついて生じやすいか、について、以下の要素と誤用状況を明らかにすること。

- (a) 談話環境 (初出/再登場)
 - (b) 名詞タイプ (単数形/複数形、可算名詞/不可算名詞)
 - (c) 名詞句の修飾 (形容詞/前置詞 *de* を用いた補語/関係節)
- (3) (2) の結果に基づいて生じやすい誤用パ

ターンの「基本型」を特定し、記述的に検証すること。

- (i) 基本型: 談話環境 (初出/再登場)・「単数・可算名詞・修飾なし」
- (ii) 基本型におけるスペイン語習熟度レベル別の傾向
- (iii) その他の型: 談話環境 (初出/再登場)・「単数・可算名詞・修飾あり」
- (iv) JP群の冠詞選択の特徴 - EN群・NS群を参照して -

まず(1)は、JP群の冠詞使用の全体的な傾向を把握することを目的として、JP群全体およびスペイン語習熟度レベル別に冠詞選択の変化について確認する。(2)は、冠詞選択に関わる要素に着目して、各条件における誤用の実態を観察することを目的とする。この段階は、(3)で誤用パターンを抽出するためのスクリーニングとしても位置付けられる。(3)では、(2)の結果に基づいて、談話環境別にこの条件を満たす名詞句 (基本型) の冠詞使用の状況を観察する(i)。続いて、基本型のスペイン語習熟度別の傾向を整理し(ii)、さらにその他(「修飾あり」の名詞句)の場合も確認する(iii)。また、当該条件下に見られるJP群特有の特徴を、異母語話者群のデータを参照させて明らかにする(iv)。

最後に、これらの点について、どの表・図を用いて検証を行うのか対応関係を提示する。

まず表1により母語群間・スペイン語習熟度レベル間のデータに偏りがなければ確認する。次に表2および表3を用いて、JP群における冠詞誤用の全体的傾向と習熟度レベル別推移を把握し(1)の検証を行う。さらに、表4および図1では、EN群・NS群を参照しつつ相対頻度の比較を行い、(3iv)を検討する。

これらに加え、誤用の発生状況を要素別に分解して調べるため、表5において談話環境(初出/再登場)と誤用の関係を検討し(2a)、表6では名詞タイプ(性、数、可算/不可算)と誤用の関係(2b)、さらに、表7を用いて修飾要素(形容詞・補語・関係節)の有無と誤用の関

係を観察し (2c) の検証を行う。(3)の(i)~(iii)の検証の際には、新しい表は作成せず、はじめに表形式で整理した一覧とこれまでに提示した表を参照する。

3. 結果

本章では、JP 群の冠詞選択と誤用の傾向について記述する。前半 (3.1) では、誤用分布の全体像を把握するため、1) JP 群全体および習熟度レベル別、母語別の誤用分布を提示し説明する。続いて、要素別に分解し、2) では談話環境 (初出・再登場) 別、3) 名詞タイプ別、4) 修飾要素別の誤用分布を確認する。

後半 (3.2) では、前半 (3.1) の結果を踏まえ、誤用が起こりやすい条件を抽出する。具体的には、1) 基本型として「談話環境」・「単数・可算名詞・修飾なし」を扱い、その後、2) 基本型におけるスペイン語習熟度レベル別の推移を示し検証する。さらに、3) では、その他の型として、「談話環境」・「単数・可算名詞・修飾あり」の場合を取り上げ、最後に 4) EN 群・

NS 群のデータについても扱う。

3.1. 日本語母語話者におけるスペイン語冠詞誤用の分布

1) 誤用分布

表 2 において、名詞句における冠詞の使用 (正用と誤用を含む) は、定冠詞 395 件、不定冠詞 223 件、無冠詞 102 件であった。件数の比較では、使用総数・誤用数ともに定冠詞が不定冠詞を上回った。誤用率の観点からは、定冠詞の 12%、不定冠詞の 7% が誤用であり、無冠詞の場合には誤用パターンが一定していない。

誤用の内訳 (表 2) を見ると、不定冠詞が文脈上必要な箇所に定冠詞を用いた誤りが多く、具体的には、*un* が期待される位置に *el* を使用した例が 17 件あり、これは *el* の誤用全体の 74% を占めた。同様に、*una* が期待される箇所に *la* を配置した例が 14 件で、*la* の誤用の 74% に相当する。これらの結果から、定冠詞の誤用の過半数以上 (約 67%) は、不定冠詞との置換ということが分かる。定冠詞 *el* が期待され

表 2. 誤用分布 (JP 群全体) (名詞句数 =957, n=39)

		正誤計	正用数	誤用数	誤用率	文脈上必要な冠詞・Ø・その他									
						un	una	unos	unas	el	los	la	las	φ	他
定冠詞	cl	164	141	23	14%	17	2	0	0	*4	3	1	0	0	0
	la	198	179	19	10%	0	14	0	0	2	0	/	0	1	2
	los	15	15	0	0%	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0
	las	18	14	4	22%	0	0	0	1	0	0	0	/	3	0
	計	395	349	46	12%	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
不定冠詞	un	137	129	8	6%	/	1	0	0	6	0	0	0	0	1
	una	82	75	7	9%	2	/	0	0	1	0	4	0	0	0
	unos	1	1	0	0%	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0
	unas	3	2	1	33%	0	0	0	/	0	0	0	0	1	0
	計	223	207	16	7%	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Ø (N)		102	71	31	30%	6	3	0	0	**10	0	**10	0		2
al		34	31	3	9%	***1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
del		33	24	9	27%	***6	0	0	0	0	***1	0	0	0	2

(*del, al は総数、誤用計、誤用率に含まず。El → del: 2/el → al: 2)

(**el の詳細 : el:6; al:4, la の詳細 : la: 9; de la: 1)

(***al の詳細 : al → a un 1; del の詳細 : del → de un: 5/del → un: 1; del → de los: 1)

た箇所不定冠詞 *un* を置換してしまった例も 6 件、*la* の箇所に *una* を置いてしまった例も 4 件見られた。定冠詞を用いるべき箇所で冠詞を用いないことを選択してしまった例も *el*、*la*、それぞれ 10 件ずつ確認され、定冠詞と無冠詞の使い分けに課題があることが判明した。

次に、JP 群におけるレベル別の誤用分布を以下に示す。

表 3 には、学習者が使用した冠詞（定冠詞、不定冠詞、無冠詞 (Ø)）と、その正用・誤用の数、そこから算出された誤用率が示されている。

まず、JP 群の A レベル（初級）は 12 名から構成されており、冠詞の使用件数については、冠詞（正用・誤用を含む）が定冠詞 93 件、不定冠詞 40 件、無冠詞 30 件であった。定冠詞の使用件数は不定冠詞のおよそ 2 倍であったが、

誤用率には大きなばらつきがみられた。このレベルでは冠詞の脱落が多く、無冠詞を選択したうちの 53% が不適切な判断であった。

誤用の内訳としては、文脈上 *un* が必要な箇所に *el* を使用した誤りが 7 件確認された。特に注目すべき点は、冠詞の脱落に関して、定冠詞と無冠詞の誤用が 9 件、不定冠詞と無冠詞の誤用が 6 件発生していた。

次に B レベル（中級）に属する学習者 12 名の結果を見ると、冠詞の使用件数（正用・誤用を含む）は定冠詞 103 件、不定冠詞 55 件、無冠詞 21 件であった。A レベルと同様に、定冠詞は不定冠詞の約 2 倍の使用数であった。誤用率は（使用数が極端に少ない項目では率が過大になり得るため、それらを除くと）概ね 10 ~ 20% であった。ここでも無冠詞を選択した誤用 10 件（48%）がみられた。定冠詞が必要な

表 3. 誤用分布（JP 群レベル別）

	定冠詞 / Ø	正誤計	正用数	誤用数	誤用率	文脈上必要な冠詞 / Ø / その他	備考	不定冠詞	正誤計	正用	誤用	誤用率	文脈上必要な冠詞 / Ø / その他
レベル A	cl	39	31	8	21%	un 7, una 1	del 1 (集計外)	un	28	26	2	7%	una 1, el 1
	la	48	40	8	17%	una 8		una	11	8	3	27%	un 1, las 1, Ø 1
	los	2	2	0	0%			unos	0	0	0	-	
	las	4	2	2	50%	la 1, Ø 1		unas	1	1	0	0%	
	計	93	75	18	19%			計	40	35	5	13%	
	Ø	30	14	16	53%	un 3, una 3, el 5, la 1 他 5	el 詳細 : el 3 al 2, la 詳細 : de la 1						
レベル B	cl	45	37	8	18%	un 6, el 2	del 1, al 1 (集計外)	un	36	33	3	8%	el 3
	la	52	46	6	12%	una 4, el 1, 他 1		una	18	15	3	17%	un 1, la 2
	los	1	1	0	0%			unos	1	1	0	0%	
	las	5	3	2	40%	Ø 2		unas	0	0	0	0%	
	計	103	87	16	16%			計	55	49	6	11%	
	Ø	21	11	10	48%	un 1, el 3, 他 6							
レベル C	cl	80	73	7	9%	un 5, el 1	al 1 (集計外)	un	73	70	3	4%	una 1, Ø 1, 他 1
	la	98	93	5	5%	una 2, Ø 1, 他 2		una	53	52	1	2%	Ø 1
	los	12	12	0	0%			unos	0	0	0	-	
	las	9	9	0	0%			unas	2	1	1	50%	Ø 1
	計	199	187	12	6%			計	128	123	5	4%	
	Ø	51	46	5	10%	un 2, el 2, 他 1	el 詳細 : al 2						

(名詞句数 A: 192, B: 240, C: 525, 計: 957; n = A: 12, B: 12, C: 15)

箇所に配置できなかったケースのうちの8割は、無冠詞か定冠詞かの選択において判断を誤っていた。

続いて、Cレベル(上級)の学習者15名のデータにおいては、使用件数(正用・誤用を含む)は定冠詞199件、不定冠詞128件、無冠詞51件であった。誤用率に関しては、(使用数が1桁であることが原因で誤用率が大きな割合となっているものを除くと)概ね10%以下となった。無冠詞の誤用率も10%であり、A・Bレベルの誤用率と比較しても低い数値を示した。このグループの特徴は、誤用パターンが一定でない、すなわち分布が比較的広範に及んでおり誤用件数が少ない点である。

ここからはA(初級)・B(中級)・C(上級)のレベル間の誤用数の推移について述べる。まず、スペイン語習熟度の向上に伴い誤用は減少していることが示された。冠詞タイプ別にレベル間の増減を確認すると、定冠詞は初級、中級、上級の数値が19%、16%、6%、不定冠詞は13%、11%、4%、無冠詞は53%、48%、10%となっており、いずれも段階的に減少していた。

一方、誤用の分布自体はA、B、Cの3つのレベルで概ね共通しており、誤用がランダムに生じているのではなく、一定のパターンに基づいて発生していることが確認された。

続いて、JP群およびEN群のデータにNS群のデータを加え、併せて参照できるようにした表と図を示す(表4、図1)。

表4のJP群とEN群の数値を比較すると、定冠詞・不定冠詞はEN群において使用総数(正誤計)が多いが、無冠詞はJP群においての出現数が目立った。誤用率を見ると、定冠詞と無冠詞はJP群の誤用の値が大きいが、不定冠詞はEN群のほうが大きくなっている。誤用の分布は定冠詞においては共通する誤用が多い。不定冠詞に関して、EN群で不定冠詞 *un* を使用したところ、必要な冠詞は *el* であったケースが22件(JP群の約2倍)、不定冠詞の選択は正しいが、性の誤用が発生したケース(*un* を

選択したが文脈上必要な冠詞は *una*)が17件(JP群の約4倍)みられた。無冠詞の誤用はJP群が30%、EN群が15%であった。誤用内訳について、各母語群において、全誤用数から定冠詞、不定冠詞、無冠詞の誤用数の割合を算出すると、JP群では誤用の49%が定冠詞(100件)、17%が不定冠詞(35件)、33%が無冠詞(68件)の誤用だった。一方、EN群では61%が定冠詞(92件)、31%が不定冠詞(52件)、無冠詞は11%(19件)となっていた。

図1は、表4の結果を視覚的に補足するために提示した。本図では、EN群およびJP群については冠詞の使用総数(表4に示した正誤計)を、またNS群については冠詞の使用状況のみを抽出し、棒グラフとして示した。図1により、3つの母語群の全体的な傾向はおおむね共通していることが読み取れた。定冠詞単数(*el, la*)・不定冠詞単数(*un, una*)に関しては、JP群・EN群の使用数がNS群を上回っていることが分かる。これに対し、無冠詞の使用については、NS群が多く、EN群の約2倍、JP群の約1.5倍に達していることが視覚的に読み取れた。

2) 談話環境(初出/再登場)別の誤用分布

表5に、ある名詞が文中に初めて現れる場合(初出:F)と、再度言及される場合(再登場:R)の誤用分布を示した。(表の見方は、2.2.参照のこと。)

表5のJP群において、定冠詞 *el* を選択したが不定冠詞 *un* を配置すべきだった37件はすべて初出(F)の環境で起きた。また、定冠詞 *la* を選択したが *una* を配置すべきだった25件もすべて談話への導入時(F)であった。また、*un* を選択したが *el* が必要であった9件は再登場(R)場面にみられ(初出で定冠詞が使える文内照応用法② *uso endofórico*、1.1.参照)、*una* を選択したが *la* が必要であった7件も再登場(R)にみられた(初出で定冠詞が使える連想照応用法① *Anáfora asociativa*、1.1.参照)。これは、談話に名詞を初めて導入する際には不定冠詞、再

表 4. 誤用分布 (3 群比較表) (10,000 語中)

JP (n=39)	正誤計	正用数	誤用数	誤用率	文脈上必要な冠詞・Ø・その他											
					un	una	unos	unas	el	los	la	las	Ø	他		
定冠詞	cl	358	308	50	14%	37	4	0	0	*9	7	0	0	0	2	
	la	432	391	41	10%	0	31	0	0	4	0	/	0	2	4	
	los	33	33	0	0%	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0	
	las	39	31	9	22%	0	0	0	2	0	0	0	0	7	0	
	計	862	762	100	12%	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
不定冠詞	un	299	281	17	6%	/	4	0	0	11	0	0	0	0	2	
	una	179	164	15	9%	4	/	0	0	2	0	9	0	0	0	
	unos	2	2	0	0%	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	
	unas	7	4	2	33%	0	0	0	/	0	0	0	0	2	0	
	計	487	452	35	7%	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
Ø (N)	223	155	68	30%	13	7	0	0	**22	0	**22	0	0	4		
EN (n=35)	正誤計	正用数	誤用数	誤用率	文脈上必要な冠詞・Ø・その他											NS (n=33)
					un	una	unos	unas	el	los	la	las	Ø	他		
定冠詞	cl	537	485	52	9%	25	0	0	0	*32	2	15	0	0	10	315
	la	475	453	22	5%	0	7	0	0	10	0	/	0	5	0	317
	los	42	32	9	24%	2	0	5	0	0	/	0	0	2	0	52
	las	35	27	7	21%	0	0	0	5	0	0	0	0	2	0	24
	計	1089	998	92	8%	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	708
不定冠詞	un	386	339	47	12%	/	17	0	0	22	0	2	0	0	5	260
	una	139	134	4	4%	2	/	0	0	0	0	0	0	0	2	142
	unos	2	2	0	0%	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	7
	unas	2	2	0	0%	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	7
	計	530	478	52	10%	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	418
Ø (N)	131	111	19	15%	0	2	0	0	**5	0	**5	0	0	7	333	

(*del, al は総数、誤用計、誤用率に含まず。EN: el → del: 12/el → al: 20)
 (** 詳細 : φ → el, φ → al, φ → la, φ → de la において正規化前は各 1)

登場の際には定冠詞を使うという談話参照の基本的なルールに違反しているという誤用である。

JP 群の無冠詞 (Ø) の誤用に関して、初出の名詞で不定冠詞 (un, una) が必要な場合にも関わらず脱落してしまう例が 20 件 (「Ø → un」が 13 件、「Ø → una」が 7 件)、再登場 (R) の文脈において定冠詞が必要なのに無冠詞とした例が 31 件 (「Ø → el」が 20 件、「Ø → la」が 11 件) 見られた (表 5)。すなわち、JP 群における冠詞の誤用は、「新たに導入される名詞に対して定冠詞を用いること」「新たに導入される名詞

で不定冠詞が必要なのに無冠詞を選択すること」、また、「再登場の文脈で定冠詞の使用が求められるのに無冠詞を選択すること」である。

一方、EN 群のデータでは、「新規導入名詞に定冠詞を使用する (EN-F 時に、「el → un」が 25 件など)」および「既出名詞に不定冠詞を用いる (EN-R 時に、「un → el」が 20 件など)」が生じやすい傾向が示された。また、JP 群ではあまり見られない性の取り違えの誤用 (表中では、un → una) が再登場の文脈で 15 件見られた。

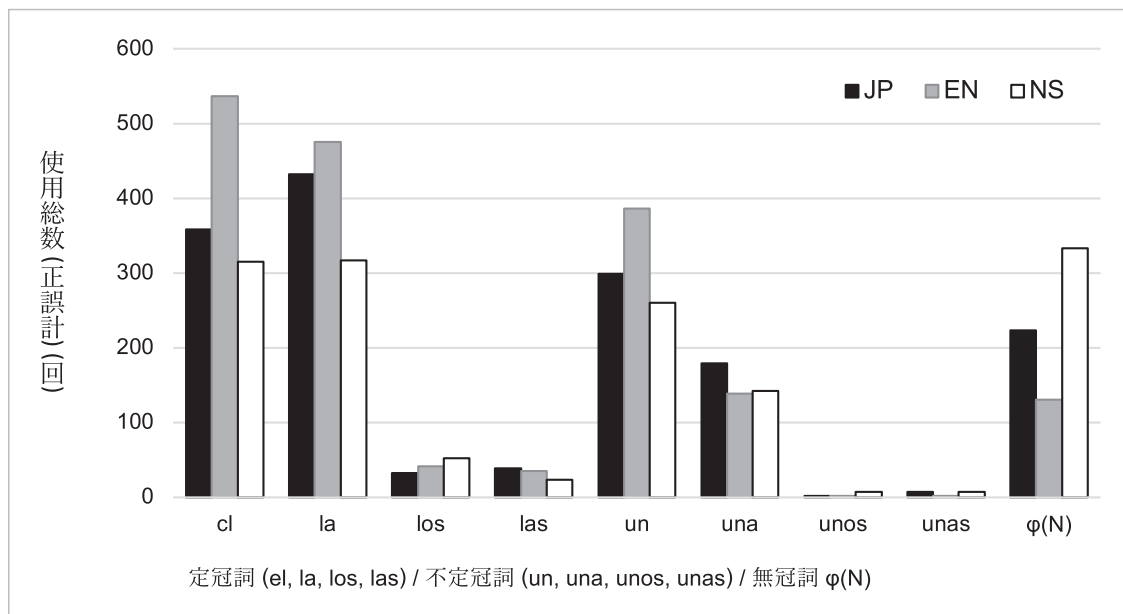


図1. 使用総数 (3群比較グラフ) (10,000語中)

表5. 談話環境別の誤用分布 (JP群・EN群)

誤用ペア	JP-F (件)	JP-R (件)	EN-F (件)	EN-R (件)
el → un	37	0	25	0
el → una	4	0	0	0
el → los	7	0	2	0
la → una	31	0	7	0
la → el	2	2	5	5
la → ∅	2	0	5	0
los → un	0	0	2	0
los → unos	0	0	5	0
los → ∅	0	0	2	0
las → unas	2	0	5	0
un → una	4	0	2	15
un → el	2	9	2	20
un → la	0	0	0	2
una → un	2	2	2	0
una → el	0	2	0	0
una → la	2	7	0	0
unas → ∅	0	2	0	0
∅ → un	13	0	0	0
∅ → una	7	0	2	0
∅ → el	20	2	5	0
∅ → la	11	13	2	2

(F = 初出, R = 再登場) (10,000語中)
 (例: el → un とは、学習者は el を選択したが文脈上 un が必要だった場合)

表5より、JP群とEN群に共通する誤用の中心は、「新しい名詞を導入する際に定冠詞を使う」という点であることが明らかになった。

3) 名詞別の誤用分布

まずJP群の結果を示し、その後、JP群とEN群の比較、NS群のデータをEN群・JP群に参照した場合についても記述する。

表6のとおり、JP群における出現数上位は *rana* [カエル] (146回)、*niño* [少年] (63回)、*casa* [家] (57回)、*día* [日] (47回)、*chico* [少年] (46回) などであり、いずれも可算名詞の単数形であった。上位21語における平均誤用率は約12%であった。

JP群において誤用率が20%を超えた名詞は、*árbol* [木]、*botella* [瓶]、*estanque* [池]、*lago* [湖]、*mañana* [朝]、*animal* [動物]、*río* [川] であり、場所や環境に関する語が多く含まれていた。誤用率10%～18%の範囲にある名詞は、*rana*, *ranas* [カエル]、*niño* [少年]、*chico* [少年]、*bosque* [森]、*tronco* [幹]、*amigos* [友達] であった。

誤用の内容について、誤用のタイプは次の3種類が存在している。①不定冠詞が必要な文脈

表 6. 名詞別の誤用分布

	性	数	可算	名詞	正規化なし		10,000 語中						
					JP		JP			EN			NS
					出現数	誤用数	出現数	誤用数	誤用率	出現数	誤用数	誤用率	出現数
1	f.	sing.	c.	rana[カエル]	146	16	319	35	11%	458	42	9%	206
2	m.	sing.	c.	niño[少年]	63	8	137	17	13%	280	37	13%	105
3	f.	sing.	c.	casa[家]	57	2	124	4	4%	69	2	4%	77
4	m.	sing.	c.	día[日]	47	2	103	4	4%	102	2	2%	71
5	m.	sing.	c.	chico[少年]	46	6	100	13	13%	87	7	9%	2
6	m.	sing.	c.	perro[犬]	42	3	92	7	7%	205	10	5%	86
7	f.	sing.	c.	familia[家族]	34	0	74	0	0%	82	7	9%	49
8	m.	sing.	c.	bosque[森]	31	4	68	9	13%	82	7	9%	49
9	m.	sing.	c.	ciervo[鹿]	30	2	65	4	7%	59	7	13%	45
10	m.	sing.	c.	árbol[木]	28	6	61	13	21%	37	0	0%	4
11	f.	sing.	c.	botella[瓶]	20	5	44	11	25%	0	0	-	0
12	m.	sing.	c.	perrito[犬]	20	0	44	0	0%	54	5	9%	4
13	m.	sing.	c.	estanque[池]	18	4	39	9	22%	10	0	0%	21
14	f.	sing.	c.	noche[夜]	14	1	31	2	7%	20	0	0%	24
15	f.	pl.	c.	ranas[カエル]	11	2	24	4	18%	15	0	0%	21
16	m.	sing.	c.	lago[湖]	10	2	22	4	20%	20	0	0%	17
17	f.	sing.	c.	roca[岩]	9	0	20	0	0%	35	2	7%	13
18	m.	sing.	c.	tronco[幹]	9	1	20	2	11%	37	0	0%	26
19	f.	sing.	c.	mañana[朝]	8	2	17	4	25%	32	0	0%	36
20	m.	pl.	c.	amigos[友達]	7	1	15	2	14%	2	0	0%	13
21	f.	sing.	c.	piedra[石]	7	0	15	0	0%	7	0	0%	7
22	f.	sing.	n.c.	agua[水]	6	0	13	0	0%	59	7	13%	13
23	m.	sing.	c.	animal[動物]	6	3	13	7	50%	20	5	25%	13
24	f.	sing.	c.	rama[枝]	6	0	13	0	0%	12	0	0%	4
25	m.	sing.	c.	río[川]	6	2	13	4	33%	22	5	22%	30

(性：男性名詞 = m. 女性名詞 = f. 数：単数形 = sing. 複数形 = pl. 可算名詞 = c. 不可算名詞 = n.c.)

で定冠詞を使用、②無冠詞化、③定冠詞が必要な文脈で不定冠詞を使用。この3つの誤用タイプに誤用率 10% 以上の名詞を分類して例を挙げると、タイプ①は、*rana* [カエル]、*niño* [少年]、*botella* [瓶] などあり、この型が誤用の約半数を占めた。誤用判定の理由はいずれも談話導入時に定冠詞を使用したことで、前項の指摘とも整合する。タイプ②の名詞例としては、*bosque* [森]、*mañana* [朝] が挙げられる。タイプ③には *rana* [カエル]、*animal* [動物] などが含まれ、既に言及済みの名詞に対して不定冠詞

を選択する誤用であった。また、名詞の性の判断が難しい語 (*bosque* [森]、*estanque* [池]、*animal* [動物]、*árbol* [木]) について、多くの場合、正しく性が選択されていた。さらに、可算名詞と不可算名詞の場合の誤用傾向については、今回のデータでは不可算名詞の例が 1 語のみ (*agua* [水]、すべて正用) であったため、判断は保留とする。

次に、JP 群と EN 群のデータを比較する。表 6 に記載のある上位 21 語において、EN 群の平均誤用率は約 4% であり、前述した JP 群の約

12%と比べると半分以下の値であった。ただし、これは JP 群で出現の多かった名詞の順に並べ替えた場合の結果である。EN 群の名詞の出現数を多いものから並べた場合³⁾、上位 22 語（出現数同数の語が複数あったため 1 語多い）の平均誤用率を算出すると、約 8% であった。この場合にも、JP 群のほうが EN 群より誤用率は高かった。

JP 群、EN 群の両群において誤用があった名詞は、*niño* [少年] (JP: 13%, EN: 13%)、*ciervo* [鹿] (JP: 13%, EN: 13%)、*animal* [動物] (JP: 50%, EN: 25%) などであった。一方、どちらかの群において誤用率が高かった語については、*botella* [瓶] (JP: 25%, EN: 産出なし)、*mañana* [朝] (JP: 25%, EN: 0%)、*estanque* [池] (JP: 22%, EN: 0%)、*árbol* [木] (JP: 21%, EN: 0%) などであった。

次に、NS 群のデータも参照すると、表 6 において JP 群で出現数が特に多かった名詞のうち、*rana* [カエル] は NS 群で 206 回であったのに対し、JP 群では 319 回、EN 群では 458 回確認された。また、*niño* [少年] についても、NS 群の 105 回に対し、JP 群では 137 回、EN 群では 280 回と、いずれも NS 群を上回る出現数となっていた。一方で、NS 群と JP 群との間で出現数に大きな差がみられる名詞も存在し

た。例えば、*chico* [少年] は、JP 群では 100 回出現したのに対し、NS 群では 2 回にとどまっていた。さらに、NS 群で使用された名詞を出現頻度の高い順に並べる⁴⁾ と、*crystal* [ガラス]、*tarro* [瓶] のように、JP 群ではほとんど使われていない名詞も含まれていた。

4) 修飾要素に関する誤用分布

表 7 の結果において、JP 群の修飾要素に関する誤用の 78% は「形容詞なし、前置詞 *de* なし、関係節なし (n,n,n)」の型であった。これにより、統語的複雑さとは関係なく、単純な名詞句において冠詞選択を誤ることが認められた。修飾要素別にみると、名詞に形容詞修飾のあった場合が約 10%、前置詞 *de* で名詞を説明した場合が約 8%、関係節を使った名詞句が約 2% あった。

EN 群においても、誤用のうち 93% が「形容詞なし・前置詞 *de* なし・関係節なし (n,n,n)」の場合であり、JP 群と同様に単純な名詞句において誤用が発生する傾向がみられた。また、EN 群は、表には 2 つの型 (n,n,n/y,n,n) のみが記されている。これは、この 2 つの型以外の型においては正しく冠詞を選択できていた、もしくは使用がなかったことを示す。すなわち、前置詞句や関係節によって名詞が修飾される場合には正しく冠詞を使用していたことが明らかと

表 7. 修飾要素と誤用分布

群	タイプ	件数 (割合)	詳細 (誤用)
JP	n,n,n	68(78%)	cl → un:17, cl → una:2, la → una:10, la → el:1, las → unas:1, las → Ø:3, un → una:1, un → el:3, una → un:2, una → la:3; unas → Ø:1, Ø → un:5, Ø → una:3, Ø → el:8, Ø → la:8
	y,n,n	9(10%)	la → una:3, un → una:1, un → el:1, una → el:1, Ø → el:1, Ø → la:2
	n,y,n	7(8%)	cl → los:3, la → una:1, una → la:1, Ø → un:1, Ø → el:1
	n,n,y	2(2%)	la → el:1, un → el:1
	y,y,n	1(1%)	la → Ø:1
EN	n,n,n	52(93%)	cl → un:10, cl → los:1, cl → la:6, los → un:1, los → unos:2, los → Ø:1, la → una:3, la → el:2, la → Ø:2, las → unas:2, las → Ø:1, un → una:7, un → el:7, un → la:1, una → un:1, Ø → una:1, Ø → el:2, Ø → la:2
	y,n,n	4(7%)	la → el:2, un → el:2
タイプ・件数 (割合) (正用)			
NS	n,n,n:837(80%); y,n,n:114(11%); n,y,n:67(6%); y,y,n:9(1%); n,n,y:19(2%); y,n,y:1 (1% 未満)		

なった。

NS 群の作文（正用の分布）においては、使用された名詞のうち約 80% が「形容詞なし・前置詞 *de* なし・関係節なし (n,n,n)」型を使用していたことが示された。前置詞 *de* や関係詞 *que* などの文内修飾を含む構造は全体の 10% 以下であることも分かった。

3.2. 誤用パターンの特定

1) 基本型：談話環境（初出／再登場）・「単数・可算名詞・修飾なし」

まず、「単数・可算名詞・修飾なし」という最も単純な名詞句構造に限定し、名詞が談話に初めて導入される場面（初出：F）と、すでに言及された対象を再び参照する場面（再登場：R）における誤用傾向を示す。

初出環境で使われた「単数・可算名詞・修飾なし」は 279 件、そのうち 227 件（81%）が正用、52 件（19%）が誤用であった。再登場環境では 238 件、そのうち 222 件（93%）が正用、16 件（7%）が誤用であった。

冠詞別にみると、初出環境の正用では不定冠詞 *un* (93 件)・*una* (47 件) が中心となっており、適切な使用とされる無冠詞 \emptyset (31 件) や定冠詞 *la* (33 件)・*el* (23 件) も一定数産出されていた。

しかし、初出環境の冠詞使用分布をみると、その誤用の中心は定冠詞を必要以上に配置してしまう点と冠詞の脱落にあった。代表的な定冠詞の誤用例は以下の例文である (1)。この例では、第 1 行目の物語冒頭部分であるにもかかわらず、初出の要素である *niño* [男の子] および *rana* [カエル] に定冠詞を使用した点に誤りが見られる。

- (1) *Un día, el niño tiene la rana.* [n.25: L1]
 one day, the boy has the frog.
 ‘ある日、その男の子はそのカエルを所有している’

また、初出環境では必要な箇所に冠詞が欠落し、無冠詞を名詞と組み合わせてしまう例もみられた (2) (3)。例えば、場所に関する名詞は、*un estanque* [池] のように初出の際は不定冠詞が好まれるもの (2) と、*el bosque* [森] のように初出で定冠詞を伴って導入できる名詞 (3) がある。

- (2) [...] *llega a estanque.* [n.58: L3]
 arrives to pond
 ‘池に着く’

- (3) [...] *en bosque con su perro.* [n.58: L3]
 in forest with his dog
 ‘森で彼の犬と一緒に’

続いて、再登場環境の場合について扱う。登場人物や場面背景などの中心的な物語構成要素について、定冠詞を用いて照応される事例は、正用例として *el* が 87 件、*la* が 115 件観察された。一方、誤用は 16 件と、正用の件数と比べると少ないものの、誤用判定の理由は共通していた。すなわち、談話内に導入済みの対象を、不定冠詞や無冠詞によって新情報として再導入してしまい誤用判定となっていた。例えば、すでに登場しているカエル (*rana*) について言及する際に、不定冠詞を伴って *una rana* と表現すると、本来指示すべき *la rana* とは異なる新たなカエルが物語に登場することになる。このような誤用には、カエル (*rana*) が 6 件あり、主人公の男の子や犬を再登場の文脈で不定冠詞を使用して *un niño*、*un perro* と呼び直す例もみられた。

また、再登場環境において、すでに談話に登場している要素に無冠詞を用いる例も確認された (4)。

- (4) [...] *fuleron a buscar a rana.* [n.176: L7]
 went to look for frog
 ‘カエルを探しに行った’

スペイン語では、何か特定のものを指し示すためには冠詞を使用する必要があり (1.1. 参照)、例文 (4) のように、対象が既に特定済みであるはずの場面において無冠詞の使用は文法的に許容されない。読み手 (聞き手) の側からは「先ほどと同じカエル」なのか「別の新しいカエル」なのか判別できなくなり、物語の展開が理解できなくなってしまう。

以上から、JP 群では、不定冠詞による初出導入と定冠詞による再参照という談話的機能が適切に機能していないことが明らかになった。これが機能しない場合、初出で聞き手がまだアクセスできない情報を共有済みであるかのように扱う (例文 (1))、あるいは統語的に必要な冠詞を脱落させる (例文 (2) ~ (4)) などのように、指示対象物の適切な導入および追跡が困難となる。また、既知要素を新しい情報として再導入することで物語の主要構成要素の追跡が妨げられるケースも確認された。

2) 基本型におけるスペイン語習熟度レベル別の傾向

ここでは、まず初出環境における冠詞選択が、A レベル (初級)、B レベル (中級)、C レベル (上級) 間でどのように推移したかに焦点をあてて記述し、その後、再登場環境についても同様に示す。

A レベルの初出環境における正用率は 65% (正用 46 件、誤用 25 件) であった。誤用詳細をみると、定冠詞 *el/la* を選択したケースが最多 (16 件) であり、無冠詞としたケースが 7 件、不定冠詞 *un/una* を選択できたのに性を取り違えたケース (*un* を選択したが *una* が正解、*una* を選択したが *un* が正解) が 2 件あった。

B レベルでは、正用率が 77% (正用 56 件、誤用 16 件) であり、A レベルと比べて正用率が上昇していた。誤用詳細は、A レベルと同様に、定冠詞 *el/la* を選択して誤用と判定される場合が 9 件あり、無冠詞が 6 件、不定冠詞 *una* を使用した性の誤用 (*una* を選択したが *un* が

正解) が 1 件発生していた。

C レベルでは、正用率が 92% (正用 125 件、誤用 11 件) に到達し、誤用率は 8% にまで低下している。ここでは定冠詞 *el/la* の使用が 6 件、無冠詞が 3 件、不定冠詞 *un/una* の誤用が 2 件であった。A・B レベルと比較すると、C レベルでは「初出環境における定冠詞 *el/la* による導入」の誤りが減少していた。

続いて、再登場環境においては、A レベルの正用率は 92% (正用 55 件、誤用 7 件) であった。冠詞使用内訳をみると、正用 55 件のうち定冠詞 *el/la* が 52 件と既知参照に定冠詞を用いる傾向がすでに確立している。B レベルでも同様に 91% (正用 51 件、誤用 5 件)、C レベルではさらに正確さが増し 97% (正用 116 件、誤用 4 件) の正用率であった。

3) その他の型：談話環境・「単数・可算名詞・修飾あり」

続いて、談話環境別 (初出/再登場) の「単数・可算名詞・修飾あり」の場合について扱う。ここでいう「修飾あり」とは、①形容詞による修飾、②前置詞 *de* による補語、③関係詞 *que* などを用いた関係節による修飾を用いた場合を指す。ここでは、JP 群において観察された②および③のケースを取り上げる。

まず、②「単数・可算名詞・*de* を用いた補語」の出現は 59 件であり、そのうち正用が 49 件 (83%)、誤用が 10 件 (17%) であった。正用のうち、初出環境が 45 件、再登場環境が 4 件であった。誤用のうち、初出環境は 8 件、再登場環境が 2 件であった。

まず、初出環境において *de* を使用した補語を伴う名詞に定冠詞 *el/la* を用い、正用と判断された 20 件に注目したい。本来、初出の場合には不定冠詞による導入が原則であるが、*de* 補語の存在により名詞の指示対象が特定され、定冠詞の使用が可能となる。例文 (5) は第 1 行目の文で、犬とカエルを導入する場面である。初出の要素を定冠詞と不定冠詞の機能を区別しな

がら、文法的にも正しい選択を行っている。

- (5) [...] *el perro de Ricardo capturó una rana.*
 [n.215: L1]
 the dog of Ricardo caught a frog
 ‘リカルドの犬はカエルをつかまえた’

次に、③「単数・可算名詞・関係詞」の出現は18件であり、そのうち正用が16件(89%)、誤用が2件(11%)であった。正用のうち、初出環境において11件、再登場環境では5件であり、誤用では、初出環境、再登場環境ともに1件ずつであった。

ここでも、導入される名詞に関係節が付加される場合には、初出の文脈であっても定冠詞の使用が可能である。例えば、(6)の例文の場合である。

- (6) [...] *y se cayó en la lagunilla que estaba abajo.* [n. 243: L9]
 fell in the small-pond that was below
 ‘下にあった小さな湖に落ちた’

例文(6)では、関係詞や補語を用いない場合、導入要素「湖」は不定冠詞を伴って *en una lagunilla* と表される。しかし、ここでは関係詞によってその湖がどのようなものであるかが具体的に説明されているため、定冠詞の使用が適切となる。

4) JP 群の冠詞選択の特徴 – EN 群・NS 群を参照して –

ここでは、まず JP 群と EN 群との相違点を検討し、その後 NS 群のデータについても記述する。EN 群において、初出環境で「単数・可算名詞・修飾なし」の場合の主な誤用は、不定冠詞を選ぶ文脈にも関わらず定冠詞を選択してしまうことであった。また、この誤用は EN 群にも JP 群にも共通して見られる現象であることが示された。ただし誤用率は、EN 群では約

13% (初出環境の場合、正用 246 件、誤用 38 件) であり、JP 群の約 19% を下回っていた。A レベル (初級) の誤用率に限定してみると、EN 群 A レベルでは約 17% (初出環境の場合、正用 52 件、誤用 11 件) であり、JP 群 A レベルの約 35% と比較して約 18% の差があった。再登場環境では、JP 群・EN 群のいずれも誤用率は1桁台に収まっていた (EN 群の再登場環境の場合、正用 297 件 (92%)、誤用 26 件 (8%))。

冠詞の性数の一致に関しては、JP 群においてこの誤用はほとんどみられず (表 4 および表 5)、EN 群の誤用傾向と質的に異なる特徴を示した。

NS 群のデータにおいて、初出環境における「単数・可算名詞・修飾なし」の場合を確認したところ、冠詞のタイプ別の出現数は、多い方から、定冠詞、不定冠詞、無冠詞の順であったことが分かった。詳細は、定冠詞 *el/la* が約 41% (211 件)、不定冠詞 *un/una* が約 29% (152 件)、無冠詞が約 15% (77 件)、縮約形の *al/del* が約 11% (59 件)、その他が約 3% (18 件) であった。物語の冒頭などで新しい要素を導入する場面において、NS 群は一定数の定冠詞付きの名詞もしくは無冠詞を使用していることが認められた。無冠詞の場合は、総称表現や *casa* などを含む慣用的定型表現という理由から無冠詞での使用が許可されるケースであった (1.1. 参照)。定冠詞では、連想照応や唯一物への言及、あるいは読み手との共有知識に基づく照応など (1.1. 参照) が認められ、いずれの場合も文法的に許容される使用であった。一方、JP 群の初出環境にも無冠詞の使用 (47 件) は見られるものの、その3分の1以上 (16 件、約 34%) は誤用であった。

4. 考察

本章では、まず第3章で得られた主な結果を整理し、どの点に着目して考察を進めるのかを明確にした後、考察の内容を展開する。

第3章において、JP 群の冠詞使用には以下

の特徴が確認された。(1) 定冠詞の誤用が相対的に多く、その中心は不定冠詞との置換および冠詞の脱落であった。誤用は一定のパターンに基づいて分布していた。スペイン語習熟度レベルの上昇に伴い誤用数は減少したが、誤用の分布傾向は各レベルで共通していた。(2) 談話環境別では、初出環境で定冠詞を用いる誤用と冠詞の脱落がみられ、再登場環境では既出要素に不定冠詞や無冠詞を用いる誤用が確認された。名詞タイプは、可算名詞の単数形の場合に相対的に誤用が多かった。修飾要素に関しては、修飾を伴わない名詞句に困難が示された。(3) JP 群における主な誤用パターンは、「初出環境」における「単数・可算名詞・修飾なし」の名詞句の場合であることが明らかになった。他母語群のデータを参照すると、JP 群は冠詞の脱落、定冠詞・無冠詞の誤用が相対的に多く、EN 群では不定冠詞および性の誤用が多い傾向が示された。初出環境で定冠詞を用いる誤用は両群に共通しており、JP 群では性数不一致の誤用はほとんど見られなかった。

以上の結果を踏まえ、本章では、以下の論点に焦点をあてる。第一に、誤用の要因について、母語や既習言語の影響と普遍的な発達過程 (Dulay & Burt, 1974) の観点から整理する。第二に、母語群間におけるスペイン語冠詞選択の相違点について明らかにする。第三に、誤用と談話環境 (初出・再登場) の関係に注目し、とりわけ談話機能 (導入・照応) との関連において、認知的要因も含めた考察を行う。第四に無冠詞について取り上げ、さらに、第五に語彙選択および名詞句の統語的複雑さと冠詞選択の関係についても検討する。最後に、これまでの結果を踏まえて、教育的示唆を導出する。

まず前提として、本研究のデータにおいて、JP 群全体の誤用分布 (表 2) とそのスペイン語習熟度レベル別の誤用分布 (表 3) には概ね共通した傾向が認められ、誤用は一定のパターンに基づいて発生していること (ランダムに起きているのではない) が確認された。これは、誤

用が一定の規則性をもって発生するという先行研究の指摘 (Corder, 1967; Selinker, 1972; Centro Virtual Cervantes, n.d.; 1.3 参照) と一致するもので、本研究における誤用分析がその原因や学習者の習得過程を検討する上で有効な手がかりとなり得ることを示している。ただし、無冠詞の場合 (表 2) においては、定・不定冠詞と比較すると誤用傾向が一定していなかった。レベル別に確認したところ (表 3)、A レベル (初級) においては B・C レベル (中・上級) に比べて誤用件数が多く誤用の内容も多様であった。これらの結果から、無冠詞の選択が誤用として現れる背景には、複数の要因が関与している可能性が考えられる。ここでいう複数の要因には、本研究の設計に関して既に言及してきた (1.1 参照) 情報の導入・照応といった語用論的要因、名詞タイプや修飾など統語的要因に加え、日本語ではスペイン語のように共有情報を形態的に明示しないという言語間の差異 (Morimoto, 2025) (1.2 参照) など、学習者の選択を不安定にさせる要因に含まれる。

次に、誤用の要因について、転移的要因 (母語を含む既習言語の影響) と発達的要因 (言語習得過程にみられる共通の現象) (Dulay & Burt, 1974) の観点から検討する。まず転移的要因としては、日本語 (母語) には名詞句の共有情報 (新情報か既知情報か) を形態的に標示するという発想自体が学習者の中間言語に組み込みにくい点が挙げられる。この点は、日本語では共有情報の形態的な明示が必須ではないため、聞き手のアクセス可能性を冠詞で標示するスペイン語体系と構造的に対応しにくいという指摘 (Morimoto, 2025) と整合する。ただし、機能面においては、日本語の言語資源を使用してスペイン語冠詞に相当する表現を実現することが可能であることから (1.2. 参照)、該当機能を担う形式がスペイン語と異なっている点が問題の 1 つであると考えられる。これに加えて、英語の冠詞体系がスペイン語と完全には一致しないため (1.2. 参照)、既習英語の基準を部分的

に転用する場合にも誤用が生じうる。

他方、発達の要因としては冠詞の形態的知識（定・不定・無冠詞の形式や用法）と、談話機能（導入／照応）とが、学習過程において直ちに統合されるとは限らない点が挙げられる。本研究の結果は、定冠詞・不定冠詞・無冠詞の形式が理解されていたとしても、それを導入・照応という談話機能と結びつけて運用するには時間差が生じる可能性があることを示している。すなわち、誤用の多くは統語的知識の不足というよりも、「聞き手が当該名詞にアクセス可能か（同定できるか）」という判断と冠詞の形式との結び付きが十分でない段階を反映していると解釈できる。

母語群間の比較に目を向けると（表4）、EN群において冠詞の種類を選択は適切であるにもかかわらず、性の取り違えによって誤用となる例（不定冠詞 *un* を選択したが *una* が正解、17件）が特徴的であった。このような誤用はJP群では発生しておらず、EN群に特有の要因が関与していると考えられる。これについて、スペイン語冠詞が名詞の性・数に応じて形を変えるとという形態特性（RAE, 2010）（1.1. 参照）に照らすと、EN群にとっては、冠詞というカテゴリーそのものよりも、性一致という形態操作が新たな負担となっている可能性がある。一方、JP群では（表4）、定冠詞の誤用が全体の約半数を占め、無冠詞の誤用（約33%）がこれに続くことから、定冠詞と無冠詞の使い分けが主要な課題であることが示された。JP群の無冠詞誤用率はEN群の2倍に達していた（表4、JP: 30%; EN: 15%）ことを考慮すると、JP群では無冠詞の用法の理解がポイントとなってくる可能性が高い。また、EN群では全誤用の約60%が定冠詞に集中しており、これにより定冠詞の運用に困難を抱えていることが明らかになった。

また、物語を追跡する上で重要であった *niño* [少年], *chico* [少年], *rana* [カエル] のような具体可算名詞については、JP群、EN群のいずれにおいても、初出と再登場の切り替えを冠詞

によって標示できない段階が一定程度認められた（両群とも誤用率が約10～13%）（表5）。これについては、学習過程に共通する特徴と考えられる。

誤用と談話環境（初出・再登場）の関係に注目すると（表5）、JP群においては、談話に新しい情報を導入する初出環境において誤用が起きやすいことが示された。具体的には、不定冠詞で導入すべき名詞への定冠詞使用、ならびに定冠詞もしくは不定冠詞の使用が必須の文脈で無冠詞の選択、というのが主要な誤用の型として確認された。これはスペイン語の文法上、「談話に初めて導入する際に不定冠詞、再登場の際には定冠詞を使う」という談話参照に関する基本的なルール（Morimoto, 2011; Leonetti, 1999; Kempson, 1986）（1.1. 参照）が十分に理解されていない可能性を示唆している。それと同時に、スペイン語では「聞き手にとってアクセスできない情報である」ということを形態的に明示する必要があるという前提そのものが、JP群に十分に内在化されていないことを示している。

JP群においては、初出環境と再登場環境の誤用数に差が認められたこと（表5）から、この群の冠詞学習の過程は、「既出要素を追跡する機能」が先行して理解・運用される一方で、新規要素を適切に提示する「導入」機能の発達には時間を要するという傾向が示唆された。スペイン語習熟度レベル別に見ても（表3）、初出環境では初級レベル（A）において適切でない定冠詞の使用や無冠詞による導入が目立つのに対し、中級レベル（B）以降では不定冠詞による導入が増加し、「新情報のときは不定冠詞」という原則が部分的に定着し始める様子が見られた。一方、再登場環境では初級段階から「既知・参照のときは定冠詞」という対応関係が比較的安定しており、上級に至るにつれて母語話者の運用に近づく傾向が認められた。

ここで、先行研究においては、誤用が初級段階にとどまらず中級・上級段階に至るまで持続することを指摘する研究（Fernández, 1988, 1997）

と、知識の深化に伴って誤用が減少するとする研究(西川, 2006)が併存している(緒言参照)ことを踏まえると、本研究で示された「機能ごとに発達の進行に時間差が見られる」という結果は、学習過程の実態を説明し得る妥当な解釈であると考えられる。

さらに、「導入」「照応」の区別については、冠詞の形態的知識に加えて、談話上のどの時点を「聞き手にとっての初出」とみなすかという認知的要因も関与している可能性がある。本研究の作文課題では視覚情報(イラスト)が提示されていたため、学習者は「読み手・聞き手からアクセス可能」と判断し、初出環境であっても定冠詞を選択した可能性が考えられる。この誤用はJP群初級レベルに限らず上級レベルおよびEN群でも観察された。また、Ionin, Ko & Wexler (2004)が指摘するように、学習者が冠詞選択の基準を「聞き手が同定できるか(定性)」ではなく「話し手が特定しているか(特定性)」に置く傾向を有する場合、視覚的に提示された対象を話し手が心内で特定しているというだけで定冠詞を選ぶ行動は説明がつく。本研究において観察された、初出環境での定冠詞使用は、この解釈基準のずれが一因となっているとも考えられる。

続いて、無冠詞の使用について考察する。まず、図1におけるNS群の無冠詞の使用数について扱う。物語においては、既に共有した情報の追跡に用いられる定冠詞(例えば、*el*: 315回)や、新規導入を示す不定冠詞の(*un*: 260回)の使用頻度が高くなることは容易に想像できるが、無冠詞もそれらと同程度(333回)も産出されていた点は看過できない。なぜなら、冠詞を伴わない名詞は、特定の対象を指示できないという性質を有しているためである(1.1. 参照)。この結果は、無冠詞が談話内で果たしうる機能を再検討する必要性を示すと同時に、今後の冠詞指導の在り方を検討する上で重要な示唆を与えるものと考えられる。

JP群に特有の問題として、初出環境におけ

る無冠詞使用の一部が、理論的規範(1.1. 参照)としている無冠詞使用と機能的に一致しなかった点が挙げられる。無冠詞の誤用については、意図的に選択した場合と冠詞カテゴリーが意識化されないまま冠詞が脱落してしまった場合を区別して考える必要がある。JP群では、場所に関する名詞(*bosque* [森]、*estanque* [池]、*camino* [道])や時間に関する名詞(*noche* [夜]、*medianoche* [真夜中])など、本来は冠詞を伴うことが多い語において無冠詞が用いられる例が観察され、この原因は文法知識が不十分であるためと推測される。また、スペイン語では情報へのアクセス可能性を明示する必要があることを十分に理解しないまま「冠詞を付けなくても意味は通じる」と省略ともみなされる判断をした可能性も否定できない。ここで、日本語では、スペイン語では冠詞を伴う名詞の多くが無冠詞名詞句(ØN)によって表現可能であることが指摘されている(Kobashi, 2013)という点を踏まえると、「無冠詞でも意味が成立する」という既習言語(母語)の知識が不適切に使用されることにより、スペイン語において要求されるアクセス可能性の標示が阻害される点が懸念される。

さらに、日本語からの逐語的翻訳や、非母語で物語を構築する際の認知的負荷により、冠詞が脱落した可能性も考えられる。一方、NS群の無冠詞使用については、場面に結びついた唯一物や語用論的に同定できる対象について文法的に許容される範囲において用いられる例があった。これに対し、JP群の無冠詞使用は参照の追跡困難を引き起こす例も見られ、スペイン語の談話管理機能が、無冠詞使用によって妨げられている点は課題として位置づけられる。

語彙選択の側面に目を向けると(表6、註3、註4も参照)、母語群ごとに一定の偏りがみられた。JP群では、物語要素を追跡する際に同一名詞を繰り返し用いる傾向が強く、一方で、NS群では多様な語彙が用いられ、JP群、EN群ほどには同一名詞を繰り返し使用せずに物語

を記述していることが観察された。

名詞句の統語的複雑さととの関係（表7）においては、JP群の誤用の78%は「形容詞なし・前置詞なし・関係節なし (n,n,n)」という単純な名詞句タイプにおいて発生していた。この結果から、誤用は構文的複雑さに起因するのではなく、名詞の語彙的特性や談話文脈に基づく要因に由来している可能性が高いことが示された。他方、前置詞 *de* による補語や関係節などの修飾要素を伴う名詞句の場合には、誤用割合は相対的に低く、これは修飾によって指示対象が具体化される場合、初出であっても定冠詞が許容されうるという文法知識が適切な冠詞使用に役立つ可能性も考えられる。実際、EN群では、前置詞句や関係節で名詞を修飾する構造において正しく冠詞を使用できていた。これは、名詞を前置詞句や関係節で修飾する際には定冠詞の使用が許容されるという規則の習得により、当該構造を用いることで正答率が向上できることを示している。また、NS群においても、「形容詞なし・前置詞なし・関係節なし (n,n,n)」型の名詞句が全体の約80%を占めていることが観察されている（表7）。この結果は、スペイン語学習者の立場から見れば、自然なスペイン語産出において、統語的に複雑な構造の使用よりも、単純な名詞句における冠詞使用の正確さを高めることが重要であることを示唆している。

以上を踏まえると、本研究で観察された冠詞の誤用は、単一の要因によって説明されるものではなく、少なくとも、母語および既習言語からの転移的影響、スペイン語の形態知識と談話機能の統合過程における発達の要因、さらに談話管理に関わる認知的判断が相互に関連して生じていると整理できる。

最後に、本研究から得られる教育的示唆について述べる。第一に、JP群において誤用が起きやすいのは「初出環境」「単数・可算名詞・修飾なし」という条件に焦点を当て、「新情報の導入には不定冠詞を用いる」という談話規則を明確に指導することが重要であると考えられ

る。特に、スペイン語では話し手ではなく聞き手のアクセス可能性に基づいて冠詞を選択するという基準を明示的に示し、視覚情報が共有される（本研究の課題のような）課題条件下で生じやすい判断のずれを意識させることが有効であると考えられる。

第二に、談話的判断に関しては、JP群のレベル別誤用分布（表4）においてレベルの上昇とともに誤用が減少したことから、初級レベルの学習者は、冠詞の語形（形式）と機能は知識としては把握していても、それらを談話の文脈に応じて適切に運用する段階には至っていない可能性がある。このことから、初級レベルでは、「新情報の提示には不定冠詞を用いる」という基本原則を、該当構造の名詞句に限定して反復的に扱い、特に、冠詞の選択肢は3つ（定冠詞／不定冠詞／無冠詞）であること、定冠詞と不定冠詞、定冠詞と無冠詞の用法と機能について比較を通して明確に示すことが適切な冠詞の運用につながると考えられる。

第三に、無冠詞について、これは単なる省略ではなく、条件に基づいて選択される形式の一つであり、無冠詞を定冠詞・不定冠詞との機能的比較を通して位置づけつつ、無冠詞が許容される環境を具体的に提示する必要がある。冠詞が母語に存在しない学習者に対しては「名詞には原則として定冠詞または不定冠詞が付され、その選択によって聞き手は当該名詞の情報状態（新情報か既知か）を判断する」という談話的機能と標示の重要性を明示する。そのうえで、無冠詞が基本的には「種類やカテゴリーを指すこと」を説明するとともに、許容される表現（例えば習慣的表現や慣用句）および文脈を具体的に提示することが必要だと考えられる。

第四に、母語背景による差異を踏まえ、JP群に対しては導入・照応といった談話機能および情報共有の標示の重要性に焦点を当てた指導を、EN群に対しては性数の一致や縮約形を含む形態面の指導を、それぞれ重点的に行うことが望ましい。また、JP群において、既習英語

の知識がスペイン語冠詞の選択に影響しうる点を踏まえると、英語の定冠詞とスペイン語の定冠詞の機能や用法を対照的に提示することは既習知識の不適切な転用を防ぐうえで有効だと考えられる。

5. 結論

本研究は、日本語母語話者によるスペイン語冠詞選択および誤用の特徴を、英語母語話者およびスペイン語母語話者のデータを参照し、形態的・談話的観点から明らかにすることを目的とした。分析の結果、JP群の冠詞使用は形態的要因のみによって説明されるものではなく、主として談話的条件（導入／照応）に関わる判断と冠詞形式の結びつきに強く影響を受けていることが明らかになった。以下、主な知見を整理する。

JP群においては、不定冠詞が求められる初出場で定冠詞を用いる誤用、定冠詞が必要な文脈で無冠詞を用いる誤用が相対的に多く観察され、特に定冠詞と無冠詞の使い分けが大きな課題となっていた。誤用はスペイン語習熟度の上昇に伴って減少し、初級レベルでは判断の不安定さや冠詞脱落が目立つ一方、中級以降は徐々に安定し、上級では誤用が大幅に減少した。ただし、上級においても残存する誤用は主として初出導入に関わる談話判断に関わる傾向があり、誤用の分布自体は必ずしも一様ではなかった。また、無冠詞の誤用については初級レベルにおいて多様な形で現れ、複数の要因が関連している可能性が示された。

名詞タイプとの関係については、物語の主要要素として頻出する単数・可算の具体名詞に誤用が見られた。一方、名詞の性の選択はEN群と比べて安定していた。さらに、名詞句の統語的複雑さに関しては、誤用の多くは、単純な名詞句（形容詞も前置詞句も関係節も伴わない）に見られ、統語的複雑さが誤用の主な要因でないことが明らかとなった。むしろ、前置詞を用いた補語や関係節などの修飾要素を伴う名詞句

では冠詞選択が比較的適切に行われており、修飾によって指示対象が特定化される場合、初出であっても定冠詞が許容されるという知識が適切な使用に役立っている可能性が示された。

以上の結果から、JP群における主な誤用パターンは「初出環境」における「単数・可算名詞・修飾なし」であり、この条件において実際に誤用が起きやすいことが確認された。すなわち、この場合、本来は不定冠詞による導入が求められるが、日本語母語話者の一部においては「聞き手がまだ知らない情報を不定冠詞で導入する」というスペイン語談話の基本原則の理解および運用が十分に安定していないことが示された。

また、スペイン語習熟度の上昇に伴い、初出環境における誤用率が段階的に減少し、無冠詞の不適切な使用も縮小したことが確認された。これは、JP群の冠詞学習過程において、まず既出情報の追跡に用いられる定冠詞の照応機能が早期に定着し、その後に初出場面での不定冠詞使用が安定していくという、非対称的な発達過程を反映していると考えられる。EN群との比較から、初出場面での定冠詞を選択し誤用となるケースは両群に共通していた一方で、JP群では冠詞の脱落が多く、冠詞を持たない母語の影響と既習英語の知識が複合的に作用している可能性が示唆された。

本研究の限界として、分析対象が特定の作文課題に限定されているため語彙や文脈が課題形式に依存している点、サンプル数の制約から結果の一般化には慎重さが求められる点、さらに書き言葉データに基づいているため理解過程や口頭産出の実態を十分に反映していない点が挙げられる。

これらを踏まえて、今後は、次のような多角的なアプローチが有効であると考えられる。第一に、課題条件の操作が提案される。本研究では視覚共有の影響を排除できなかったが、「書き手のみが視覚情報をもつ場合」と「読み手も情報を共有する場合」を比較することができ

ば、定冠詞過剰が談話理解の未習得によるものか、あるいは視覚共有の誤認によるものかを区別できる可能性がある。第二に、談話単位の再設定が求められる。冠詞は文単位でなく談話全体で機能するため、談話単位を調整することができれば、参照追跡の失敗や導入失敗の要因をより正確に特定できると考えられる。第三に、知識面と運用面の両側からの検証が望まれる。学習者が「理解しているが産出できない」のか「そもそも認識できていない」のかを区別して検証することにより、習得課程の実態をより明確にできる。第四に、断続的調査の導入が挙げられる。冠詞習得の発達を追跡し、初出と再登場の区別およびその他の要因に基づく誤用についてどの段階で安定化するのかを明らかにすることが期待される。また、冠詞を持たない他言語話者との比較を含めることで、日本語母語話者におけるスペイン語冠詞の発達過程をより詳細に描出できると考えられる。

教育的観点からは、初級レベルにおいて「初出情報には不定冠詞を用いる」という談話的原則を明示的に扱い、その後、冠詞機能および用法を段階的に導入していく指導の重要性が示唆される。

今後は、談話的・認知的・教育的側面を統合して複数のアプローチを組み合わせた研究を進めることにより、スペイン語冠詞習得の過程をより包括的に解明することが期待される。

註

- 1) レンマ化とは、辞書に載っている形(基本形)に変換する作業のこと。スペイン語の場合は、名詞の複数形は単数形に変換し、動詞は活用前の基本形に変換する。
- 2) 本研究では、慣用表現の判別は Real Academia Española の辞書 *Diccionario de la lengua española* (第23版) [オンライン版] に従い、該当表現が loc. (慣用表現) として登録がある場合は慣用表現とみなした。
- 3) EN 群の頻出名詞ランキング (順位を JP 群

の順に合わせて入れ替えない) は以下のとおりである。rana [カエル] (185), niño [少年] (113), perro [犬] (83), día [日] (39), chico [少年] (35), familia [家族] (33), bosque [森] (33), casa [家] (28), agua [水] (24), ciervo [鹿] (24), perrito [犬] (22), tronco [幹] (15), roca [岩] (14), árbol [木] (14), mañana [朝] (13), sapo [ヒキガエル] (10), rocas [岩々] (10), noche [夜] (8), lago [湖] (8), árboles [木 (複数)] (8), amigo [友達] (8), animal [動物] (8)。

- 4) NS 群の頻出名詞ランキング (順位を JP 群の順に合わせて入れ替えない) は以下のとおりである。rana [蛙] (206), niño [少年] (105), perro [犬] (86), casa [家] (77), día [日] (71), ranita [小さなカエル] (64), familia [家族] (49), bosque [森] (49), ciervo [鹿] (45), mañana [朝] (36), río [川] (30), tronco [幹] (26), cristal [ガラス] (26), tarro [瓶] (26), noche [夜] (24), botella [瓶] (22), estanque [池] (21), ranas [カエル (複数)] (21), amiga [友達 (女性)] (21), arboles [木 (複数)] (21)。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 20K13111 (若手研究、代表者小橋さおり) の助成を受けたものです。

引用文献

- Bosque, I. (1990). *Las categorías gramaticales*. Madrid: Síntesis.
- Bosque, I. (1996). Por qué determinados sustantivos no son sustantivos determinados. Repaso y balance. En I. Bosque (ed.), *El sustantivo sin determinación*. Madrid: Visor. 13-119.
- Centro Virtual Cervantes. (n.d.). *Diccionario de términos clave de ELE*. [オンライン版]. https://cvc.cervantes.es/Ensenanza/biblioteca_ele/diccio_ele/default.htm 最終閲覧日: 2025年10月29日

- Corder, S. P. (1967). The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 5(4), 161-170.
- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dulay, H. C., & Burt, M. K. (1974). Errors and strategies in child second language acquisition. *TESOL Quarterly*, 8(2), 129-136.
- Fernández López, S. (1988). El uso del artículo en aprendices de español lengua extranjera. *Actas del I Congreso de ASELE*, 109-118.
- Fernández López, S. (1997). *Interlengua y análisis de errores en el aprendizaje del español como lengua extranjera*. Madrid, Edelsa.
- Huddleston, R., & Pullum, G. K. (2019). *The Cambridge Grammar of the English Language*, Vol. 3: Nouns and noun phrases (H. Terada, N. Nakagawa, T. Yanagi, & S. Ibaraki, Trans.). Tokyo: Kaitakusha.
- Ionin, T., Ko, H., & Wexler, K. (2004). Article semantics in L2 acquisition: The role of specificity. *Language Acquisition*, 12(1), 3-69.
- 金子朋子 (2013). 「2.3【研究例・2】日本人大学生の英語の冠詞使用」『英語学習者コーパス活用ハンドブック』34-42 頁, 大修館書店.
- Kempson, R. (1986). Definite NPs and context-dependence: a unified theory of anaphora. In T. Myers, K. Brown & B. McGonigle (Eds.), *Reasoning and Discourse Processes*. London: Academic Press. 209-239.
- Kobashi, S. (2013). *El artículo en español y sus equivalentes en japonés*, Trabajo Fin de Máster, Universidad Carlos III de Madrid, Madrid.
- Kobashi, S. (2017). *Enseñanza y aprendizaje del artículo en español por parte de estudiantes japoneses*. Tesis doctoral, Universidad Complutense de Madrid, Madrid.
- Laca, B. (1999). Presencia y ausencia de determinantes. En I. Bosque y V. Demonte (Dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe. 891-928.
- Larsen-Freeman, D., & Celce-Murcia, M. (2016). *The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Language Teachers* (3rd ed.). Boston: National Geographic Learning & Heinle Cengage Learning.
- Leonetti, M. (1999). El artículo. En I. Bosque & V. Demonte (Dirs.). *Gramática descriptiva de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe. 787-890.
- Lozano, C. (2022). CEDEL2: Design, compilation and web interface of an online corpus for L2 Spanish acquisition research. *Second Language Research*, 38(4), 965-983.
- Morimoto, Y. (2011). *El artículo en español*. Madrid: Castalia.
- Morimoto, Y. (2025). Contrastiva a la enseñanza de ELE para hablantes de japonés. *Cuadernos CANELA*, 36. 37-49.
- 西川喬 (2006). 「スペイン語の冠詞使用における問題点—語学調査から見た学習者の現状」『神戸外大論叢』第 57 巻, 第 7 号, 21-40 頁, 神戸市外国語大学研究会.
- Real Academia Española. (2009). *Nueva gramática de la lengua española, vol. I*, Madrid: Espasa Calpe.
- Real Academia Española. (2010). *Nueva gramática de la lengua española, Manual*, Madrid: Espasa Calpe.
- Real Academia Española. (n.d.). *Diccionario de la lengua española* (第 23 版) [オンライン版]. <https://dle.rae.es> 最終閲覧日: 2025 年 10 月 29 日
- Saito, A. (2005). Análisis de errores en la expresión escrita de los estudiantes japoneses. Memoria del Máster en enseñanza de español como lengua extranjera, Universidad de Salamanca,

- Salamanca.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10(3), 209-231.
- Smith, J. (1989). Topic and Variation in ITA Oral Proficiency: SPEAK and Field-Specific Tests. *English for Specific Purposes*, 8, 155-167.
- 寺崎英樹 (2024). 『名詞・形容詞・限定詞 (スペイン語文法シリーズ 3)』 大学書林.
- Yonekawa, K., & San-Mateo-Valdehita, A. (2021). Análisis de errores en el uso del artículo en textos de aprendientes japoneses de español L2. Estudio de corpus. *Cuadernos CANELA*, 33. 71-89.

表 8. 資料 (付録)

	日本語母語話者 (JP 群)			英語母語話者 (EN 群)			スペイン語母語話者 (NS 群)
	レベル	Doc_id	Filename	レベル	Doc_id	Filename	Filename
1	A1	3	JP_WR_3_19_0.5_13_TBB	A1	22	EN_WR_10_22_4_13_ER	ES_WR_17_13_ASM
2	A1	5	JP_WR_11_19_1_13_N	A1	27	EN_WR_11_19_0.5_13_AF	ES_WR_18_13_AVS
3	A1	6	JP_WR_11_20_1.5_13_C	A1	88	EN_WR_13_18_5_13_ARL	ES_WR_18_13_ENO
4	A2	44	JP_WR_18_20_1.5_13_H	A2	128	EN_WR_14_20_0.5_13_CW	ES_WR_18_13_PCH
5	A2	58	JP_WR_19_21_2.5_13_SY	A2	131	EN_WR_14_20_2_13_AMW	ES_WR_18_13_RFSC
6	A2	10	JP_WR_13_20_1.3_13_S	A2	187	EN_WR_15_21_0.3_13_SG	ES_WR_18_13_RGA
7	A2	12	JP_WR_14_19_1_13_K	A2	260	EN_WR_16_23_5_13_MP	ES_WR_19_13_ACA
8	A2	20	JP_WR_15_19_1_13_TBA	A2	287	EN_WR_17_18_5_13_ARL	ES_WR_19_13_AJDC
9	A2	25	JP_WR_16_20_1.5_13_ST	A2	425	EN_WR_19_19_3.5_13_DHM	ES_WR_19_13_CCS
10	A2	28	JP_WR_16_21_1_13_O	A2	446	EN_WR_19_22_7_13_LBR	ES_WR_19_13_CLR
11	A2	30	JP_WR_17_19_1_13_HI	B1	609	EN_WR_22_21_0.5_13_SHP	ES_WR_19_13_MAVE
12	A2	37	JP_WR_17_21_2_13_KS	B1	655	EN_WR_23_21_0.5_13_JS	ES_WR_19_13_ZVM
13	B1	117	JP_WR_25_20_2_13_M	B1	662	EN_WR_23_22_0.5_13_CL	ES_WR_20_13_CFL
14	B1	70	JP_WR_21_22_4_13_M	B1	751	EN_WR_25_20_8_13_MA	ES_WR_20_13_HGR
15	B1	126	JP_WR_26_19_1_13_S	B1	788	EN_WR_26_21_6_13_EC	ES_WR_20_13_LMC
16	B1	147	JP_WR_28_23_4_13_S	B1	816	EN_WR_27_19_4_13_CJ	ES_WR_20_13_MRC
17	B1	72	JP_WR_22_19_1.5_13_M	B1	837	EN_WR_27_22_6_13_DM	ES_WR_20_13_MTS
18	B1	87	JP_WR_23_18_0.5_13_TBC	B2	1019	EN_WR_31_20_8.5_13_LRM	ES_WR_20_13_MYM
19	B2	151	JP_WR_29_20_1_13_EO	B2	1066	EN_WR_32_20_10_13_KO	ES_WR_20_13_PMP
20	B2	175	JP_WR_31_23_4_13_M	B2	1182	EN_WR_34_20_5_13_KGS	ES_WR_21_13_ADA
21	B2	176	JP_WR_31_27_0.5_13_KH	B2	926	EN_WR_29_22_1_13_WS	ES_WR_21_13_AMO
22	B2	186	JP_WR_32_40_22_13_KH	B2	974	EN_WR_30_21_11_13_ARC	ES_WR_21_13_CCV
23	B2	189	JP_WR_33_19_1_13_S	C1	1301	EN_WR_36_20_10_13_GMG	ES_WR_21_13_CMEM
24	B2	201	JP_WR_34_26_9_13_CM	C1	1309	EN_WR_36_20_5.5_13_AJ	ES_WR_21_13_CR
25	C1	215	JP_WR_37_31_13_13_CO	C1	1323	EN_WR_36_22_0.5_13_JH	ES_WR_21_13_MHM
26	C1	216	JP_WR_37_33_4_13_TM	C1	1388	EN_WR_37_20_7_13_GO	ES_WR_21_13_MPF
27	C1	220	JP_WR_38_22_4_13_YY	C1	1467	EN_WR_38_20_7_13_MCB	ES_WR_21_13_PLC
28	C1	221	JP_WR_38_34_5_13_MO	C1	1483	EN_WR_38_21_7_13_ERW	ES_WR_21_13_SPC
29	C1	222	JP_WR_38_47_7.5_13_YN	C1	1493	EN_WR_38_22_11_13_RFF	ES_WR_22_13_EMR
30	C1	223	JP_WR_38_49_10_13_MH	C1	1541	EN_WR_39_19_3_13_JB	ES_WR_22_13_IG
31	C1	229	JP_WR_39_27_10_13_YF	C1	1550	EN_WR_39_20_13_13_ECS	ES_WR_22_13_IHM
32	C1	230	JP_WR_40_41_15_13_YN	C2	1702	EN_WR_41_21_7_10_SMH	ES_WR_22_13_MML
33	C1	231	JP_WR_40_41_8_13_MI	C2	1710	EN_WR_41_20_10_13_KYC	ES_WR_22_13_SOA
34	C2	241	JP_WR_43_40_22_13_SK	C2	1725	EN_WR_41_22_2.5_13_KNS	
35	C2	237	JP_WR_41_42_25_13_MO	C2	1872	EN_WR_43_19_2.5_13_JB	
36	C2	242	JP_WR_43_42_20_13_KH				
37	C2	243	JP_WR_43_46_28_13_YK				
38	C2	233	JP_WR_41_19_1_13_NI				
39	C2	235	JP_WR_41_32_14_13_OM				